經西國讀書法

改訂版

巻四

41620
教科書文庫
4
810
41-1941
2000301575
SB
141

資料室
375.9
Ig1

教科書文庫
4
810
41-1941
2000301575

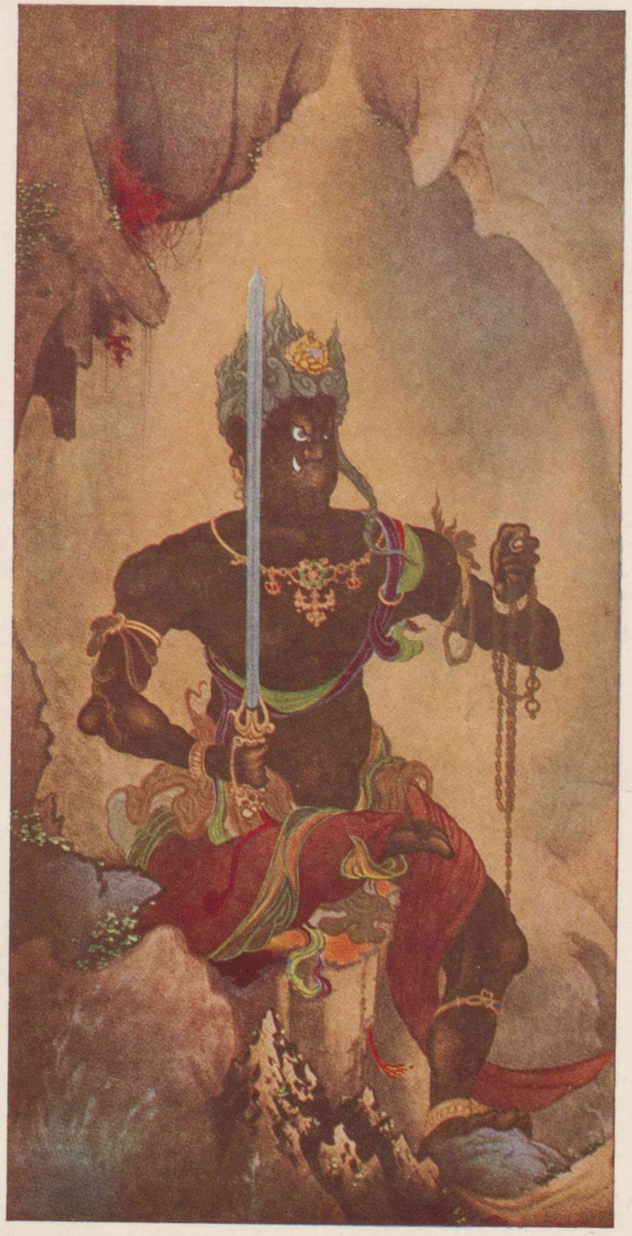
文部省檢定濟
昭和十六年九月十一日　中學校國語漢文科用

文學博士　吉澤義則　力編

純正國語讀本

早稲田叢書出版社

広島大学図書
2000301575



不動明王（狩野芳崖作）

（芳崖とフェノロサ 參照）

廣島大學圖書之印

廣島大學教 39761 圖書

不動明王圖

同じく狩野滝川の門から出て、明治新興畫壇の二大勢力となつたのは、狩野芳崖と橋本雅邦とであつた。雅邦は溫厚で悠々自適の生涯を送つたが、芳崖は血性的情熱家で、自ら早く燃え盡くした觀がある。この不動明王圖は芳崖が熱烈な信仰の一端を披瀝したもので、形よりも精神を主とし、古畫に依據するよりも、寧ろ自ら解釋し得た大聖不動尊を描かうとしたもので、人をして意志の權化、折伏（しやくふく）の本尊明王の前に拜跪せしむる趣がある。紙本。東京美術學校の所藏。

卷四目次

一　明治神宮……一
二　二月堂と三月堂……島村抱月……七
三　鰯引……正岡子規……二
四　膽力……嘉納治五郎……一三
五　翼の音……吉江喬松……二
六　狩野芳崖とフエノロサ……二七
七　潛水艦上の或る日　その一……穗積律之助（講演）……三八

八　潛水艦上の或る日 その二……穗積律之助（講演）四八
九　旅……現代歌人……六〇
一〇　五虹の錦帶橋……六三
一一　夜叉王……岡本綺堂……六九
一二　天然の惠……千家元麿……八五
一三　大同江……高濱虛子……八八
一四　元日や……內藤鳴雪……一〇〇
一五　悔いて食はず……（二宮翁夜話）……一〇一
一六　熊の話……相馬御風……一〇五
一七　仙崖和尙……一二四

一八　淸福……貝原益軒……一一九
一九　名君……菊池寬……一二四
二〇　大川の水……芥川龍之介……一三四
二一　歸朝……島崎藤村……一四四
二二　鬼作左の嬉し泣き……新井白石……一四九
二三　杉浦重剛翁 その一……小笠原長生……一五六
二四　杉浦重剛翁 その二……小笠原長生……一六三
二五　五箇條の御誓文……德富蘇峰……一七一

廣島大學圖書之印

純正國語讀本　卷四

一、明治神宮

威靈を加へる。

或は槻欅の並木により、或は蒲葵の叢林により、廣前を清め神苑を飾る。

我が國の神社佛閣、樹木によりてその威靈を加へざるものなし。或は杉により、或は檜により、或は樟樹により、或は竹柏により、或は槻欅の並木により、或は蒲葵の叢林により、廣前を清め、神苑を飾るなど、擧げて數ふべからず。中には樹木其の物に神靈を認めて社殿を設けざるさへあり。從ひて樹木の神社佛閣を莊嚴する趣致樣式種々あれども、

國産の樹木の大多數を網羅せり。

十數株の喬松の亭々として聳え立てる趣なり。

その樣式の特殊なる、明治神宮の如きは稀なるべし。殊に其の趣致の複雜にして深き意義を含めること、明治神宮の如きは極めて稀なるべし。

明治神宮の神苑は、國産の樹木の大多數を網羅せり。而して其の樹木の多くは遠近の臣民の獻納にかゝるものにして、中には赤子自ら遠く負ひ來りて植ゑつけたるもの少なからず。かく種類の多く、精神的意義の深き點より見て、明治神宮の神苑は萬國に比類なきものなるが、殊に珍しく貴きは、神門の内、拜殿を正面にして、廻廊に圍まれたる大廣前に、唯だ十數株の喬松の亭々として聳え立てる趣なり。吾等は此の計畫が、如何なる意義により、何人に考案せられ

我が特有の國土美を發揮したり。

見よ、地上は一面の白砂に清められて、其の間より、唯だ赤き太き長き松の十數幹の拔け出でたるにあらずや。而して其の長き幹の頂には、翠の圓蓋美しくかざされ

たるかを知らねど、それが我が特有の國土美を發揮したる點より見、大帝を偲び奉る赤子の心を現はしたる點より見て、恰好無上の選擇なることを歡ばずんばあらず。

吾等をして神宮に詣でしめよ。まづ清められたる參道を過ぎ、長き廣き道の左右に、寒、溫、熱の三帶にわたる無數の樹木の、疎密さまゞに植ゑ並べられたるを眺めつゝ、幾曲折の後、恭しく神門を入れば、見よ、地上は一面の白砂に清められて、其の間より、唯だ赤き太き長き松の十數幹の拔け出でたるにあらずや。而して其の長き幹の頂には、翠の圓蓋美しくかざされて、神殿の檜皮を護り奉れるにあらずや。それ松は、我が國土美の最も貴重有力なる要素なり。之れ

明治神宮の松　（川端龍子筆）

て、神殿の檜皮を護り奉れるにあらずや。

凡そ風景の美に鳴る所、いづれか此の名木の韻致に負ふところなからん。

を三景に見るに、松島は名の如く松の島にして、八百八島殆んど悉く松をかざせり。天之橋立は二十八町四間の長く延びたる沙嘴、切れ目なく其の緑色に飾られたり。嚴嶋は朱欄海水に映れる社殿のほとりを始めとして、周圍の海岸より彌山の頂上まで、到る所に、此の常磐木を主役として、類ひなき風光の美を發揮せり。その他、瀬戸内海に羅布せる花彩列島より、須磨、明石、舞子、三保、虹、千代、もろ〳〵の松原、及び無數の湖畔、山頂に至るまで、凡そ風景の美に鳴る所、いづれか此の名木の韻致に負ふところなからん。

翻りておもふに、明治神宮の大廣前を十數幹の長松に飾れるは、國粹の樹木美を以て齎かれませる神の御目のあた

他の樹木、皆神門の外に星羅して、唯だ此の木のみを神の側近に奉仕せしめたり。

りを裝ひ奉れるにはあらずや。あらゆる他の樹木、皆神門の外に星羅して、唯だ此の木のみを神の側近に奉仕せしめたるは、全國の樹木が盟主たる名木を代表として、御傍らに仕うまつらせたるにはあらずや。根より頂まで枝葉の密叢せる樹木により、御目路を遮らずして、赤裸なる長幹の高く秀でたる木により、神殿をさやかに望ましめたるは、九千萬の臣子が仰望の志を成したるものにして、同時に齋かれ給ふ大帝の國土臣民を見はるかし給ふ大御心に副ひ奉れるにはあらずや。大帝の御製に

高どのの窓てふ窓をあけさせて
四方の櫻のさかりをぞ見る

大帝、此の神境に鎭まりまして廣き大御前の此の名木の長き幹の間より、內苑外苑に植ゑ集められたる樹林を見渡し給ひ、寶物殿、繪畫館、青年館、競技場等のあらゆる設備を見そなはし、延いては、更に大東京を通ほして、曾て知ろしめし、大八洲の光輝ある現容を見さけ給ふ。

と宣へるあり　恭しく思ふに、大帝、此の神境に鎭まりまして、廣き大御前の此の名木の長き幹の間より、內苑外苑に植ゑ集められたる樹林を見渡し給ひ、寶物殿、繪畫館、青年館、競技場等のあらゆる設備を見そなはし、延いては更に、大東京を通ほして、曾て知ろしめし〻大八洲の光輝ある現容を見さけ給ふならん。　しか思ふは、畏けれども、國民無上の心强き想像にはあらずや。

松は日本の選まれたる木にして、美容と、品位と、節操と、重疊累積せる傳統とを有する樹木なり。　今や此の名木を以て我が大帝の大廣前を飾り奉る。　吾等は此の計畫の言語に絕して實に意味深きを感ぜずんばあらず。

島村抱月
明治大正の文學者
元早稻田大學教授
藝術座の創立者
名は瀧太郎
石見の人
大正七年歿
年四十八

二　二月堂と三月堂

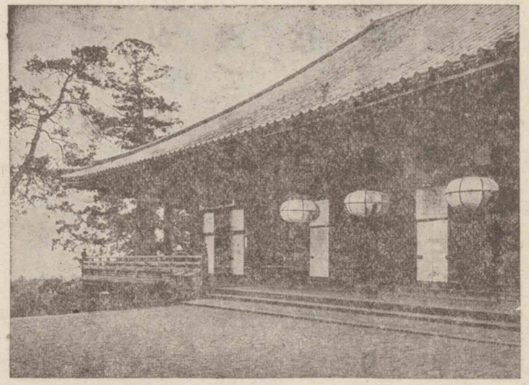
島村抱月

二月堂と三月堂とは手向山のすぐ下に隣して立つてゐるが、奈良の古堂塔の中で最も境地のすぐれてゐるのは、此の邊である。　興福寺の五重塔は、偉觀には相違ないが人家に接しすぎてゐる。　東大寺金堂の大佛殿は大きいが、唯だの寺構である。　ひとり二月堂、三月堂、四月堂等の一群は、かけ離れて周圍との調和に特殊の意味を現はしてゐるが、中でも其の意味の中心を代表してゐるのは三月堂である。　眞に千年以上の古堂院に接するときの畏れと靜寂と神祕

二月堂と三月堂とは榮と寂、生と死との對照である。

とが、此の建物の前に立つた時に感ぜられる。

三月堂は千一二百年前の造營にかゝり、奈良最古の建物であるといふ。之れに隣して、半ば山に據り雄大な構をなしてゐるのは二月堂である。二月堂と三月堂とは榮と寂、生と死の對照である。而してこの古都に古寺院を觀んとする自分等に取つて、現在の榮と生とが如何に殺風景に、過去の寂と死とが如何に高貴に感ぜられることであらう。二月堂の觀音は今も諸人の信

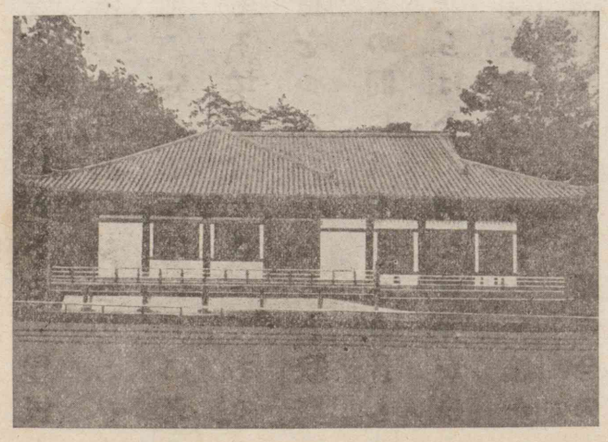


二月堂

千年の戸はすべて鎖されて、寂然として永久の眠りに入つてゐる。

仰厚く、本堂からは御みくじも出ればお札も出る。堂めぐりのお百度を踏む者もある。お水取りの儀式もある。要するに眼をあいて生きて繁昌してゐるのが二月堂である。

三月堂は其の傍らの平地に立つたまゝ、千年の戸はすべて鎖されて、寂然として永久の眠りに入つてゐる。奈良へ來て觀る寺は、斯うでなくてはならないと思ふ。松、杉、檜の巨木に色々の紅葉を綾どつた背景



三月堂

折しもの薄れ日がさして、一面の落松葉にかすかな香ひがある。

屋根瓦の苔、金物の錆、柱の朱の剝げの淋しさ、軒裏の胡粉のわびしさ。

寂寞の氣が人を襲ふ。

や翼景やに圍まれて、白く打開いた寺地には、折しもの薄れ日がさして、一面の落松葉にかすかな香ひがある。屋根瓦の苔、金物の錆、柱の朱の剝げの淋しさ、軒裏の胡粉のわびしさ、木材の朽ちて黑み細つた木地の荒れ。薄暗い光の落ち込む堂内には、大香爐の上に積もる埃が冷たさうである。

そこを離れて石段に腰をかけ目をつぶつてゐると、寂寞の氣が人を襲うて來る。二月堂との間に落ちる水の音も次第に消え行き、刹那の寂寞の中からは全く別な世界がひろがつて來る。千餘年の昔、こんな大建築のプランを、細かい一線一畫の末までも頭の中に描いた其の人の頭と、今の吾吾の頭との働き工合などを比べて考へて見る。斯うして

正岡子規
明治の俳人
名は常規
伊豫松山の人
明治三十五年歿
年三十六
七浦
安房國安房郡

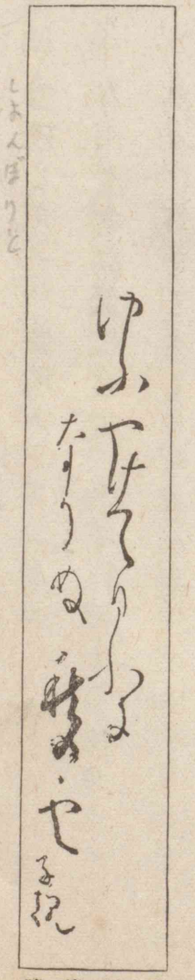
ゆふやけて日和になりぬ秋の雲　子規

茫然としてゐる十餘分間は實に貴い時間であつた。（『筆』）

三鰯引

正岡子規

七浦の夕雲赤し鰯引
秋淋し毛蟲はひ行く石疊



子規筆蹟

すごくと月さし上る野分哉
行き暮れて大根畑の月夜かな

錢よむ音。

乞食の錢よむ音の夜寒かな
穴にのぞく餘寒の蟹の爪赤し
雪殘る頂一つ國境
春雨や傘高低に渡舟
島々に灯をともしけり春の海
青々と障子にうつる芭蕉かな
行く春の酒をたまはる陣屋かな
夕風や白ばらの花皆動く

嘉納治五郎
教育家。前東京高等師範學校長兵庫縣の人昭和十三年歿年六十九
從容自若として事に當たり、天下の大事を談笑の間に決す。

膽力は、天稟に之れを有して居る者も少なからずあるが、必ずしも修養によつて得られぬものではない。

四　膽力

嘉納治五郎

大丈夫と生れた甲斐には、死生の境に出入しても、從容自若として事に當たり、天下の大事を談笑の間に決するだけの膽力を有したいものである。膽力のないものは天井から落ちる鼠の糞にも、膽を冷やし色を失ふやうになるが、膽力のある者は、白刃眼前に閃き、危岩頭上に崩れかゝつても、悠然として身を持することが出來る。

膽力は、天稟に之れを有して居る者も少なからずあるが、必ずしも修養によつて得られぬものではない。上杉謙信

オルソン（1758—1805）

が十四五歳の時、大敵に追はれながら、門番所の板敷の下に潛伏して安眠して居たといひ、德川光圀が六歳の時、暗夜に刑場へ行つて死人の首を持つて歸つたといひ、ネルソンが幼時から恐怖の何者たるかを知らなかつたといふが如き、これらは皆天稟と見るべきものであるが、併しながら修養によつて剛膽の人となつた例も、亦決して稀れではない。

昔、武田信玄の家臣に岩間大藏左衞門といふ者があつた。その容貌はいかにも魁偉で、一見したところ儼然たる大丈夫であつたが、その性質は至つて臆病であつた。信玄は之れを實戰に試みたが、彼れは七たび進んで七たび退いた。信玄は、これはとても普通の方法では矯正されぬと思つて

運さへ強ければ雨と飛ぶ矢丸も身に中たるものではない。

ある日の戰爭に、大藏左衞門を楯に縛つて、掩護物の少しもない吹きさらしに置き、しかも眞向きに敵に向かはせて、一歩も身動きの出來ないやうにした。その中に戰が酣になると、矢丸は雨のやうに飛んで來る。銃聲は雷の如くに轟く。大藏左衞門は恐れをのゝいて殆んど死人のやうになつたが、しかしその戰の最後まで、矢一つ丸一つにも中たらなかつた。そこで大藏左衞門は翻然として悟るところがあり、運さへ強ければ、雨と飛ぶ矢丸も身に中たるものではない、死は少しも畏るゝに足らぬものであると達觀して、その後は戰爭の度毎に奮進勇戰して、遂に武名を揚げたといふことである。

諦めるといふ心の持方の膽力養成に必要である事がわかる。

死に身になる。

之れを見ても、諦めるといふ心の持方の、膽力養成に必要なることがわかる。危險、災害等の身に迫る場合に於いて、成るべく之れを避けようとするのは、自然の人情には相違ないが、しかし、さういふ心の爲めに却て怯懦に陷る事がある。之れに反して、最惡の結果を身に受けても是非に及ばぬと覺悟を極めれば、膽が自然にすわつて來るであらう。例へば、眞劍勝負をする場合に、命を惜しんで敵刃を逃れようとしてはならぬ。まづ身を捨てる覺悟をきはめ、「吾が骨を切らせて敵の命を奪へ。」ともいふ通り、死に身になつて、その上に吾が手段と伎倆とを盡くせば、命を惜しむよりは遙かに自由が利いて、意外の働きをすることが出來る。強ひて危害を避けようとすると、煩悶し、疑惧し、狼狽するので、自械自縛の結果、十分の伎倆をも六七分しか現はし得ずして、見るにも及ばぬ不結果を見ることがある。けれども諦めるといふ心の持方の練習を積んで居る者は、危害が身に迫つた時にも、「此の場に臨み、狼狽したところで仕方が無い、只今執るべき方法は唯だ一つあるのみ。」と觀念し、その方法に全力を注いで、さて敗れたならばそれまでと覺悟を極めてかゝるから、別に惶れ惑ふやうなことがないのである。

伎倆を現はす。

落膽喪神は、時としては、その危險の結果を豫想した後ではなく、直接の瞬間に於いて衝動的に起こつて來る

落膽喪神は、時としては、其の危險の結果を豫想した後ではなく、直接の瞬間に於いて衝動的に起こつて來ることがある。これは動物の本能の一つで、殆んど制止し難き勢を

ことがある。

雲居　元和年代の奇僧松島瑞巌寺に住し、伊達政宗に優遇せらる。土佐の人

ぐつと頭をつかんだ。和尚は立ち止まつたまゝ、動かなかつた。少年は遂に手を放した。

以て發動するものであるが、かういふ場合に何か良い工夫がないであらうか。

雲居和尚は、伊達政宗に招かれて松島の瑞巌寺に住して居た名僧である。和尚は毎夜雄島の石窟へ往つて坐禪をして居たが、或時一人の少年が、和尚の悟道を試さうと思つて、路傍の松の枝の間に隠れ、和尚がその下に來たところを窺つて、手を延ばしてぐつと頭を攫んだ。和尚は立ち止まつたまゝ動かなかつた。少年は遂に手を放した。數日の後、その少年が雲居を訪ねて「近頃何處か淋しい處で怪物に御出會になつたことは御座いませんでしたか。」と尋ねると、和尚は答へて「いや別に何にもあはない。たゞ五六日前の

衝動的に起こる恐怖心を去る簡單なる一方法は下腹に力を入れることである。

夜半に、窟から歸る途中で、闇の中から自分の頭を攫んだものがあつたが、その手に溫みがあつたから、おほかた子供等の惡戯であつたらう。」といつたといふ事である。この雲居の沈勇が如何にして養はれたか。思ふに必ず心膽を練つた結果であらう。

こゝに斯樣な場合に處すべき簡單なる一方法として、少年者に告ぐべき事がある。他ではない、下腹に力を入れることである。これは氣を落ちつける一法として、經驗上、古來有効と認められて居るものである。世には、理窟の上から妖怪の無いことを信じてゐながら、暗夜墓地を通過する際、石塔の陰から突然飛び出す犬の影に、思はず膽を冷すも

のがある。かういふ時に下腹に力を入れると、今飛び出したのは、犬か、猫か、或は他のものか、判斷がつき易くなるであらう。衝動的に起こる恐怖心を去るのも、畢竟鍛錬の功に待つ外はないのであるが、吾等は年少の人に對し、まづ手始めに此の方法を實驗されることを勸める。さうして終には段段工夫を凝らし、修業を積んで、天地の顚倒するやうな大變に逢つても、泰然自若として己れを失はない樣な剛膽な人となられることを望むのである。

泰然自若として己れを失はない。

吉江喬松
佛文學者
文學博士
早稲田大學教授
長野縣の人
昭和十五年歿
年六十一

藪―籔

大空は胸をあらはして、冷たい夜氣に慄へてゐる。

じ(ぢ)つと

五　翼の音

吉江喬松

私は小高い丘の上に立つてゐた。

澄みきつた秋の夜の空は紫紺の色をたゝへて、無數の星がぴか〳〵光つてゐる。大空の半圓は遠く野の果を限つて、仄暗い野の面には低く風が流れて行くのか、藪の枯草がかさ〳〵鳴つてゐる。大空は胸をあらはして、冷たい夜氣に慄へてゐる。

私は丘の上の草の中に腰をおろして、じつとしてゐた。すうつ、すうつと草の葉が擦れあつて、下の野の方からは、蟲

聞え。

の聲が聞えて來る。

月の昇る前の東の空には淡青い光が漂つて、榎の葉の落ちた枝が細い幾本もの指を伸ばして、その光を掴むやうにしてゐた。

何處か頭の上で、さあつ、さあつと空氣を切つて飛ぶ物音がする。はつと思つて、私は頸をすくめて見上げた。はつきり見極められないが、薄黑い鳥の影が列をなして行くのが目にはいつた。さあつ、さあつと、翼の音が斷續する。

斷(斷)

空氣が搖れて、顏へ、頸へ、冷たく當る。と思つてゐると、心が妙に跳るやうで、胸の動悸が高く打ち出した。體軀ぢゆう波立つて血がめぐる。どつき、どつき鼓動する心臟の響と、さあつ、さあつと空氣を切る翼の音とは調子を合はせて鳴つてゐる。

鳴—鳴

翼の音が、少し遠くなり、微かになつて、その物音の中心が空を滑つて先へ〳〵と移つて行くと、冷たい空氣は幾重にも幾重にも輪を描いて波動を起し、その波動は次第に大きくなつて、丘の上に、野の草の葉末に及んで行くと、蟲の聲はその波動につれて調子をとり、草の葉は同じく波立つて搖れる。黑い空氣の波の震動、私の心臟もその中につゝまれて、ゆるく鼓動を立ててゐる。

冷たい。(き)

描い。(き)て

黑い空氣の波の震動、私の心臟もその中につゝまれて、ゆるく鼓動を立ててゐる。

ぼうつと野は明るくなつた。森の影が長く黑く黃枯れた草の上に敷かれて、蟲はいま目を醒ましたかのやうに爭

見え。

その波が私の體軀の細い血管の中までもくゞり入つて、體軀全體がすつきとほりでもするやうな氣がする。

つて聲を立てた。

私は月の方へ向かつて、胸へ深く光を吸ひこんだ。月の光の下に、瓦の屋根の竝んでゐる都會が見えだして來た。いつもは騷がしい響の聞えてゐる都會が、今夜に限つて何の物音も立てない。たゞ燒け跡かなにかのやうに黑く見えてゐるばかりである。

淡青い光を空にひろげて、次第に月は昇つて來た。丘の下の野も一層廣く明るくなつて、藪影がぽつり〳〵立つてゐるのも見える。ふるへるやうな水溜りも見える。光の波が今は空にも地上にも漲り溢れてゐる。その波が私の體軀の細い血管の中までもくゞり入つて、體軀全體がすつきり透きとほりでもするやうな氣がする。

私は暫くじつとして立つてゐた。

さあつ、さあつといふ音が空に聞えてゐる。私ははつと思ふと、また動悸が強く打ち出した。何物かの襲來を受けたかのやうに、思はず仰向いて見たが、何の姿も見えない。が、その音は前よりも一層近く聞えて來た。そして低く、私の體軀よりも低く、丘の中腹を掠めて行くやうだ。

私はその響の來る方へ鋭く視線を向けた。雁の群だ。十羽ばかりの雁が横に竝んで、ゆるく羽搏しながら翔つて行く。右の端にゐる一羽の鳥が他のものよりも少し先へ出て、時々頸を左右に動かし、頭を高くあげて勢よく飛んで

立てようとした

ゐるやうな

行く。

群鳥の背を滑つて視線が少し先の草原へ落ちると、そこには飛び行く鳥の影が草原の上を斜に流れて行くのが見える。野の果の低い空には、大きな星が澄んだ光できらきらしてゐるのも見える。

大きな鳥の一群、荒い羽搏、動く長い頸、その一團の生命の波動を身近に感ずると、私は怖しさと不思議さに思はず聲を立てようとした。我が生が、形の異つた羽を持ち翼を持つた我が生が、いま目の前を翔つて行く。周圍が暗くなつた。たゞ暗い音の波動だけが空にも地にも充ちてゐるやうな氣がする。

亂（乱）

リズム　韻律

狩野芳崖　明治の大畫家　長府の人　明治二十一年歿　年六十一

暫くたつた。見ると、雁の群は稍遠く隔たつて、羽搏いてゐるとも思はれない。たゞ薄黑いものがずん〳〵空を流れて行く。光の波を搔亂し、音と光とが空に亂れて不思議な波動を起し、睡つてゐる地上の草木や人家の屋根に奇妙なリズムを響かせて行く。

鳥の過ぎた後の野原はまたひつそりとして、月の光が枯草の根元まで、根元の土の小さな團塊（かたまり）にまで射しこんで、大地の胸は冷たいその光を飽くまでも吸つてゐる。

（『若き自然』）

六　狩野芳崖とフェノロサ

フェノロサ。(1853—1896)アメリカのマサチューセッツ州の人、明治十一年來朝。

嚆矢

全國に瀰漫した。

陋巷に埋もれる。

我が國に於ける近代的な美術展覽會の嚆矢ともいふべき第一回繪畫共進會が上野に開かれたのは、明治十五年の九月であつた。飛んで翌々年の四月にその第二回が同じ上野に開かれた。維新以後十幾年、歐化の思潮が全國に瀰漫して、學者、政治家、教育家、誰れ一人、由緒深い我が國固有の藝術を顧みる者がなかつたのに、今や國粹保存の機運がやうやく芽ぐみ始めて、とにかく政府主催の下に、國本位の繪畫展覽會が開かれる運びとなつたのである。久しく陋巷に埋もれてゐた畫家達が、奮ひ起つて出品を競つたのも無理はない。

狩野芳崖も此の機運に乘じて奮起した一人であつた。

心血をそゝいだ作品。

賞讃ではなくして罵倒であつた、喝采ではなくして冷笑であつた。

けれども、彼れが心血をそゝいだ作品も、當時の社會からは殆んど顧みられなかつた。第一回目は、唯だ陳列されたといふだけであつた。第二回目は三等賞を貰つたが、それは入賞中の最下位のものを得たに過ぎなかつた。後者は「花下奔馬の圖」と題して縱四尺、横二尺程の、小幅ながら極めて見事な出來で、作者も私かに許した傑作であつたが、しかもそれが社會から得た所のものは、賞讃ではなくして罵倒であつた、喝采ではなくして冷笑であつた。

さすがの芳崖も、内心がつかりして居ると、ある日、不思議な客が彼れの陋屋を音づれた。客は碧眼紅毛の西洋人であつた。取次ぎに出た彼れの妻は、少しく狼狽した氣味で、

あたふたと芳崖の居間へ來た。

「妙な人が訪ねてまゐりましたよ。あなた、西洋人が……」

「西洋人？」芳崖も怪しんだ。

「一人でか？」

「いゝえ、通辯が隨いて來まして、先生の今度展覽會へお出しになつた御作を拜見して、大變感心しましたので、急にお目に懸かりたくなつて伺ひましたと、かう申します。」

芳崖の眉はピリ、と動いた。

「西洋人の癖に生意氣な口を利きをる。不在と言つて追

眉がピリ、と動いた。

つ拂つてしまへ。」

「でも、居りますと言つてしまひました。」

「ぢや、仕方ない。氣分が惡くて臥せつてをるとでも言つておけ。會ふのは厭だ。」

狩野芳崖

夫の氣象を知つてゐる妻は、爭つても無駄だと思つたので、玄關へ出て、その通りに斷つた。

西洋人は、その日はその儘引き取つたが、二三日すると、又訪れた。そして今度は芳崖の入魂なる狩野友信の紹介狀を持つて來た。それによると、この人はエルネスト、フェノロサといふアメリカ人で、東京大

爭つても無駄。

狩野友信
畫家
濱町狩野の齋
大正元年歿
年七十

卓絶した鑑識を持つてゐる。

日本畫の眞趣を味解する。

學にお雇教師として數年來教鞭を執つて居る學者である、そして東洋美術に對して卓絶した鑑識を持つてゐるといふことである。

これを讀んだ芳崖は、さすがに前のやうに面會を謝絶する譯には行かなかつた。けれどもいかに友信の證明があるにせよ、こんな西洋人に日本畫の眞趣が味解されるわけがないと思つたので、洒落な芳崖は、一つ試驗をして見ようといふ氣になつて、彼れを伴つて舊藩主なる毛利公の邸へ出かけた。

毛利邸へ行つて、芳崖は公爵家所藏の懸物や繪卷物をあとから〳〵と出しては示した。けれどもこのアメリカ人

曾我蛇足　足利期應仁頃の畫家　李秀文の子、名は宗譽、通稱は式部、道號は宗文　文明十五年歿

胸襟を開いて語り合ふ。

は、唯だ「ハア〳〵」と云つて見て居るばかりで、容易に感嘆の詞を洩らさなかつたが、最後に女中部屋から曾我蛇足の屏風繪を取り出して見せると、彼れは始めて會心の笑みを浮かべた、そして云つた。

「これはいゝ。これは實にすばらしい傑作です。」

之れを聞いて、芳崖は驚嘆した。實を云ふと、それまではわざとさまでにもない物ばかりを仰山にして見せたので、價値ある作物は、やはりこの蛇足一つだけであつたのである、そして其の傑作をば、わざとむさくろしい女中部屋から引き出して見せたのであつた。

こゝに於いて芳崖は始めて胸襟を開いてフェノロサと

語り合ふ氣になつた。そして話せば話す程、此の米國の學者の並々ならぬ鑑識と蘊蓄とに感心した。そして西洋人の中にもかういふ人が居るかと思ふと、自分の今までの考へ違ひを、恥ぢずにはゐられなくなつた。

深い憧憬の情を持つ。

フェノロサは言つた。

「私は國に居つた頃から、日本の美術に對して深い憧憬の情を持つて居りました。けれども腹藏なく申すと、實際日本の土地を踏むに及んで、すつかり失望したのです。過去の日本美術は偉大です。しかし現在のそれは沈衰の極に陷つて居ります。それは今度の共進會を見てもよく分かります。あの會には、御國の一流の畫家の作が

沈衰の極に陷る。

獨創がない。

幾百と陳列されて居るのに、それが悉く死んで居ます。みんな古人の眞似事をやつてゐるばかりで、獨創といふものが少しもありません。大きな期待を抱いて會場へ行つただけに、私は實にがつかりしました。さうして、もう諦めて歸らうと思つた時に、あなたのお作がフト目に留まつたのです。私はハッとして、四邊が急に明るくなつた樣に感じました。どうだらう、この恐ろしい力は！熱は！　私の求めて居たものはこれだ！　これであつたのだ！　私は思はず口へ出して、さう言ひました。こんな優れた作家がゐるのに、どうして日本の社會が認めないのであらう、何とも言はないのであらう。とにかく

どうだらう、この恐ろしい力は！熱は！　私の求めて居たものはこれだ！これであつたのだ！

餘りにも無理解な一般世間の仕向に對しては、さすが不屈の芳崖も、ともすれば絶望的の氣持にならうとした。

私はその人に會はなければならない。會つてその人の意見をも聞き、私の思つてゐる所をも述べなければならない。さう思つて、此の間もお訪ねしたやうな譯なのです。あの時はお目にかゝれませんでしたが、今日はかうして十分お話を伺ふことが出來て、こんな嬉しい事はありません。」

けれども嬉しかつたのは、たゞフェノロサ一人ではない。芳崖は更にそれよりも嬉しかつた。餘りにも無理解な一般世間の仕向に對しては、さすが不屈の芳崖も、ともすれば絶望的の氣持にならうとしたが、もう今日からは悲しむにも歎くにも及ばなくなつた。彼れには今や眞に己れを知

確固不動の自覺。

理論上の根據を摑む。

つてくれる友が出來たのである。

その日を始めとして、芳崖とフェノロサとの交情は日增しに深くなつた。フェノロサの激勵によつて、彼れは確固不動の自覺を得た。フェノロサの與へた美術上の新知識によつて、彼れは自分の創作に對する理論上の根據を摑んだ。「日本の社會が理解してくれなければ、世界を相手にして描くまでの事だ。」彼れはさうまで考へるやうになつた。

今、上野の東京美術學校第一の校寶とされてゐる「慈母觀音」、ボストン博物館に陳列されて日本美術のために氣を吐きつゝある「鍾馗捉鬼の圖」、その他、彼れの名を不朽にした幾枚かの大製作は、それから僅か四年、たゞ四年しか生きる事

の出來なかつた彼れの最晩年の極めて短い期間に描かれたものである。

（『明治美談』に據る）

七　潛水艦上の或る日　その一

穗積律之助（講演）

穗積律之助
海軍造船中佐

或る國と或る國と戰ひ半ばの或る日に、あなた方が私と一所に、一隻の潛水艦に乘つて荒海を航行して居ると思つて下さい。

今、吾々が立つて居るブリッヂ――船を操縱する爲めに甲板から一段高く作られて居る、此のブリッヂから見下すと、船の長さは五十間あまり、一町に少し足りない位。船體は

寂しく取り殘された大砲。

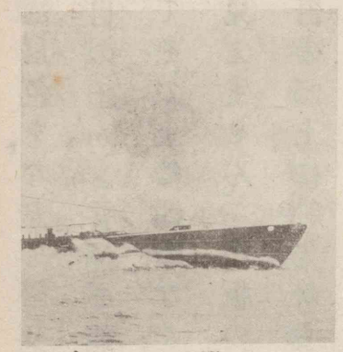
薄鼠色をなして居り、其の甲板は水を潛るといふ特別な役目の上から、普通の船のよりは遙かに低く成つて居る、そしてその上は、間斷なく波に洗はれて、前にも後にも人影一つ見えません。甲板の上には、寂しく取り殘された大砲と、吾吾の頭上に、舳先から艫まで張り渡された二本の太い針金との外に、これといつて目立つものもありませんが、これは潛つてからの水切りを出來るだけよくする爲めです。――この頭上の針金は、大砲やブリッヂの樣な背中の出つ張りものが、敵が水中に張りまはした待網に引つかゝつて、魚の樣に生捕られない爲めの用心に設けたものです。――外に無線電信の檣はありますが、これは圓い鋼のパイプで出來て居

大鯨の背に身を托して、空と水との眞中に漂つてゐる樣な氣分。

驚天動地の大活劇。

て、機械の力で自在に立て起こしが出來るもので、今はそれを甲板の溝の中に倒してあります。

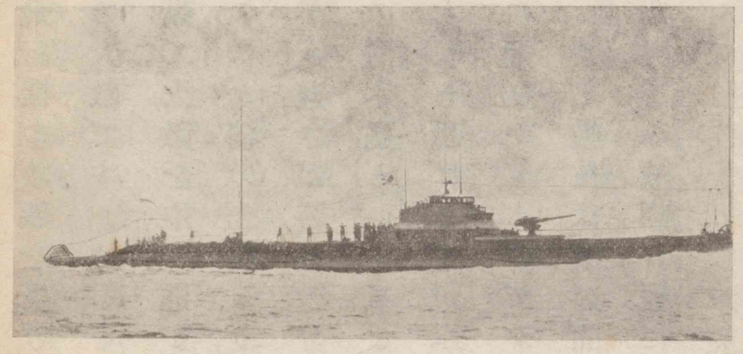
さてこの不思議な形を見下して居ると、船に乘つたといふ感じは消えて、大鯨の背に身を托して、空と水との眞中に漂つて居る樣な氣分になりませう。そして長く航海を續けると、白い波頭と、其の間に見えがくれする水平線ばかりに飽き果てた氣分になりませうが、空白のスクリーンがシネマのハンドルの一回轉によつて、驚天動地の大活劇を映し出すやうに、この單調な水と空とが、何時どのやうな歷史



潛水艦

歷史的大事件を演出する。

油斷大敵。



潛水艦の圖

的大事件を演出するか、計り知る事が出來ないのです。さてこの低いブリッヂから目のとゞく海面は、あなた方には、如何にも廣々と感ぜられませうが、廣漠たる大海原に比べると、百疊敷の中のほんの一寸四方か五分四方にも當たりません。それですから油斷が大敵です。爰で油斷大敵といふのには、二つの意味があります。一つは急行列車よりも早く飛びかゝつて來る驅逐艦や、

木葉微塵に打碎かれる。

針の樣な檣の先、雲よりも淡い一沫の煙。

氣まぐれ者

怯めず臆せず飛びかゝる。

飛行機の攻撃を受けて、木葉微塵に打碎かれるといふ心配の大敵です。然し、それよりも氣づかはしいのは、一寸の油斷で大敵を取り逃がす恐れです。水平線上に現はれる針の樣な檣の先、雲よりも淡い一沫の煙、これを認める數秒の早さ遲さが勝敗の分かれ目になるのですからね。實は、この潛水艦といふ氣まぐれ者は、水の上では小さい驅逐艦にも戰き恐れますが、水の中からは、大軍艦にも怯めず臆せずに飛びかゝるので、かういふ大きい事もいへるのです。

さて艦長は、波の間に〳〵搖籃のやうに動搖する狹いブリッヂの波除け板に身を寄せて、鋭い眼で、ぢッと行手を睨んで居りましたが、突然そばに立つて居る中尉を呼んで、默つて、ある方向を指しました。二人は急いで、双眼鏡をかざして、二言三言さゝやき合ひました。二人はやがて目を双眼鏡から離しましたが、やがて張り切つた顔の筋肉を少しゆるめて、互に會心の微笑を漏らしつゝ、うなづき會ひました。そして、

張り切つた顔の筋肉をゆるめて互に會心の微笑を漏らす。

「潛行準備！」

嚴かな艦長の命令が、直ちに艦内に響き渡りました。

司令塔は、船の背に駱駝のこぶの樣に飛び出したブリッヂの土臺を作つて居る鋼板の塔ですが、これはこの船に取つては、頭の骨ともいふべき大切な所です。今に、こゝへ、この船の腦髓たる艦長が飛び下りて來ます。さて艦長は前

敵と睨んだ檣の先がこちらに向つて來る。

嵐の前の靜けさと云つた緊張した沈默。

の命令によつて、何時でも潛れる樣に、部下を持場々々につかせましたが、今度は中尉と二人して、敵と睨んだ檣の先がこちらに向つて來る樣子によつて、潛る前に必要ないろんな觀測を下して居ります。

一分！　二分！　嵐の前の靜けさと云つた緊張した沈默が、しばらくつゞきます。

突然艦長は「潛航！」と鋭く叫びながら、司令塔に飛び込みました。つゞいて飛び込んだのは中尉です。中尉は、入口の鐵蓋をバタリと閉ぢて、手早く之れを締めつけました。そして今迄規則正しい響を傳へて運轉してゐたデイゼル機關がピタリと止まつたかと思ふと、電氣のモーターがブ

ンブン鈍い唸り聲を立てゝ廻り出しました。すべて潛水艦は水面上にある時は重油の爆發を利用するので、かの自動車の發動機を大きくしたやうなデイゼル機關によつて推進されるのでありますが、潛航の際には電力がそれに代はるのです、そして、その電力は船の底に積んである二百あまりの大型の蓄電池から取るのです。

やがて何處ともなく大きな瀧の樣な水音が聞こえて來ました。これは、タンクの口が一時に開かれて海水がその中に漲り込む響です。この船は全體が二重に出來て居て、外側は先程ブリッヂから見下した通り、水切りのよい形の船體ですが、内側はこの司令塔の下に前後に横たはつて居

る丈夫な鋼の筒なのです。　先づ藥をきざむ藥研の中に、お茶の鑵を入れて蓋をしたといふ形でせう。　その內側と外側との間の大きな場所が、全部タンクになり、艦首から艦尾までの間がいくつもの部分に仕切られて居て、その一つ一つに、水の入る口と空氣の逃げ出す穴とがあります。　それが今「潛航！」といふ命令で、その口が開かれたのですから、海の水はどん〳〵と二重船體の間に流れ込んで、刻々にこの船の重さが增して來ます。　そしてそのタンクが一杯になると、丁度鯨や龜の身體のやうに、水と同じ重さになり、飛行船がフワリ〳〵と空中を歩くと同じ工合に、水の中で自由に浮き沈みが出來るやうになります。

ほんの束の間、一分と經たない中に、私共は魚になつてしまひました。

かくしてほんの束の間、一分と經たない中に、私共は魚になつてしまひました。　水の上に殘るものは、たゞ太さ二寸位のペリスコープの先が二三寸ばかり、それが始終波の間に見え隱れして居りますが、その頂上にレンズの裝置があつて、それに映ずる海上の有樣をば、反射鏡の作用によつて、艦長は水面下に沒した司令塔內に居りながら、手に取るやうに見ることが出來るのです。

今、艦長はペリスコープのハンドルを忙しく廻しながら、前後左右の海面に目を配つて居ります。　同時に、低い乍らハッキリとした口調で、舵取りに命令を下しつゝ、目ざす敵の大軍艦が、數隻の驅逐艦に守られ乍ら進んで來る行手を

今までの苦心が水の泡となる。

さへぎる樣に、この船を操つて居ます。しかし、水に潛つてからは、水面を走る時よりも水當りが多くなり、それに電池の力にも限りがありますから水の上の半分も速力が出ません。それですから敵の進む方向やその速さを誤りなく見きはめて一番の近道を取つてその前に忍びよらなければならないのです。一歩を誤つて取り殘されたら最後、今までの苦心も全く水の泡となり、目ざす敵艦に追ひつくなどは思ひもよらないのですからね。

八　潛水艦上の或る日　その二

穗積律之助（講演）

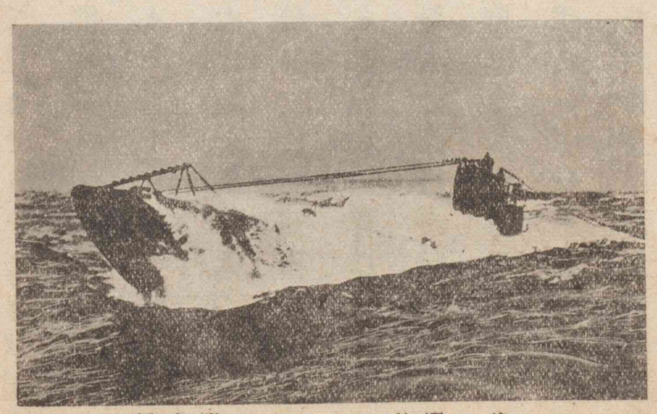
目まぐるしい程一杯に、一寸の隙間もなく取付けられて、

ハンドルを右に左に忙しさうに操つて居ます。

今の間に、此の下の部屋に降りて見ませう。こゝは司令塔のすぐ下にあつて、この船を操縱する凡ての機械が動いて居る大切な部屋です。それがまるでトンネルに入つた樣に天井が圓いのは、前にお話した內側の筒に入つたからです。前後の壁にも、天井にも、右にも、左にも、精巧な機械やら、齒車やら、パイプやらが、目まぐるしい程一杯に、一寸の隙間もなく取付けられて、その間に、數人の水兵が持場々々を守つて居ます。其の中の二人は、自動車の運轉手が、自動車の眞つしぐらに走る時でも、絕えずハンドルを動かして居る樣に、各〻の前にあるハンドルを右に左に忙しさうに操つて居ます。この二人が、この船の前後に魚の鰭のやうに

兩方に出張つて居る、あの舵を動かして、艦長から言ひつけられた深さから浮きも沈みもせぬ樣に、釣合を取つて船を進める役です。そしてその目の前にある一本針の大時計の樣なものが、今潛つて居る深さを示すもので、今その針が五十といふ所を指して居るのは、私共が水面から五十呎の水中を潛つて居ることを示して居るのです。

この人々の眞中に、一人の大尉



將に潛航せんとする潛水艦

内助の功を全うする女房役。

手ぐすね引く。

二の矢を見舞ふ。

が目を八方に配つて居ます。これがこの船の副長で、艦長が全身の注意を外なる敵の樣子に集めて居る間に、この艦を艦長の思ふ通り、調子よく操縱して行く爲めに、内助の功を全うする女房役です。この部屋の前方には士官と兵員との部屋があり、また其の床下には二百あまりの電池が一杯に置かれて居ますが、その先には、今狙つて行く敵に止めをさす魚形水雷が、四門の發射管に納まつてゐるので、その室の總員が手ぐすね引いて、「打て！」の命令を待つて居るのです。また其の後方なる圓い筒の一番後ろは、一番前と同じ水雷室で、前から打つた水雷が萬が一にも外れた場合には、身を飜して後部から二の矢を見舞ふべく、拔け目なく用

意して居るのです。

突然司令塔から「深さ百呎急げ！」といふ命令が來ました。水平舵のハンドルが忙しく廻されたと思ふと、深さを示す針が、六十、七十、八十とぐん〳〵進んで行きます。其の中に頭の上で遠雷の樣な音が、次第に遠く消えて行きました。驅逐艦のプロペラーの音です。我が潛水艦は、敵艦を護衛する爲めにその前方遙かに進んで來る此の小さい敵には目もくれず、また幸に見つからずに、その下をうま〳〵と潛り拔けたのです。やがて「浮き上れ、深さ五十呎、急げ！」の號令がかゝりました。いよ〳〵浮き上つて敵に肉迫する時が來たのです。艦は百呎の海底から一氣に浮かび上つて、

敵に肉迫する。

威風堂々と海を壓して進んで來る。

四方の海面を電光の樣に見て取る。

鹿を追ふ獵師山を見ず。

不覺をとる。

ペリスコープの先が水の上に出るや否や、艦長の目には、威風堂々と海を壓して進んで來る大軍艦の姿が映りました。之れを認めると同時に、艦長はグルリと身を廻して、四方の海面を電光の樣に見て取りました。これは鹿を追ふ獵師山を見ぬ譬の如く、一方しか見えぬこのペリスコープを前の大敵に向けて居る中に、後から來る小敵に仕止められる不覺を取らない爲めです。その一回を終はると共に、艦長の乘つて居る圓い臺はスウッと下に下つて、艦長はペリスコープの取手を握つたまゝ司令塔の床から、頭が出るばかりの井戸の中へ落ち込みました。オヤと思ふと、艦長は又すぐ臺に乘つた儘、せり上つて來て、忙しくペリスコープを

動かして居ります。この忙しい上り下りは、先の太さ僅か二寸ばかりのペリスコープではありますが、船の進むにつれてそれが跳ね上げる白波を、敵に見つけられまい、同時に敵に逃げられまいの用心の爲めですから、一刻々々敵に近づく程益々忙しく繰返されます。艦長はペリスコープの先が出る度毎に、チラリ〳〵と敵を見るだけですが、熟練した目には、それで總てが解るのです。やがて艦長の身體が身震ひするまでに引締つたと見ると、今度は上げたペリスコープを其の儘、ジイーッと、前方を睨みながら「打てッ！」の命令を下しました。四本の魚雷は、船に僅かばかりの震動を殘して直ちに飛んで行きました。魚雷は整へられたお互

シーンとして耳を澄まして居た誰れもが、思はずドッと勝鬨を上げました。

の隔たりを正しく保つて、眞直に敵の横腹を目がけて突進して行きます。壓搾空氣で走らす魚形水雷の吹き出す泡が、水面に白い尾を曳いて進んで來たのに驚いた敵の軍艦は、急いで身をかはさうとしましたが、大きな身體は、思ふ樣に身輕には動きません。其の中に「深さ百五十呎急げ！」の命令が下りましたが、この艦長の命令が終はるか終はらない中に、續け樣に二度、船の全體がビリ〳〵と震動して、雷のやうな大音響が水を傳はつて聞こえました。シーンとして耳を澄まして居た誰れもが、思はずドッと勝鬨を上げました。四本の水雷の二本が、見事敵艦に命中したのです。船はグッと前かゞみになつてぐん〳〵と潛つて行きます。

水雷の不意打に痛手を負つた敵艦が、見えない敵に無念の齒がみをして、水雷の來た方の海面を盲打ちに射撃して、死物狂ひの一人相撲を取つて居るのです。

その時頭の上で、鐵板を鐵槌で叩く樣なガン〳〵といふ音が聞こえ出しました。水雷の不意打に痛手を負つた敵艦が、見えない敵に無念の齒がみをして、水雷の來た方の海面を盲打ちに射撃して、死物狂ひの一人相撲を取つて居るのです。しかし水面にぶつかッて破裂する彈が吾々に與へる結果は、唯だそのガン〳〵といふ音だけです。その間にも沈み入つた深さが次第に增して百呎を越えた時、彈の響がピタリと止むと共に、今度は石臼を挽く樣な音が、之れに代はつて聞こえました。水の中では物音が空氣の中より遙かによく聞こえます。この薄氣味惡い響は、先に見た五六隻の驅逐艦が迫つて來たのです。この艦の中に備へつけた水中の音を聞く受話器には、尙ほはッきりとこの音が傳はりますが、敵の驅逐艦も同じくその受話器に耳を澄ましてこの船のプロペラーの音を賴りに追ひ迫りました、それが、今船の直ぐ上に來て、親の仇この下にありと突止めたのです。その瞬間です。音と云ふか、震動といふか、ピンと身體を鞭で打たれた樣に感ずると共に、艦内の電燈は一時に消えて、船は物に驚いた馬の樣に狂ひ出しました。驚く間もなく、右にも左にも、その恐ろしい響きが續け樣に起こつて、今は全く瀧壺に落込んだ小魚同樣、ゴウ〳〵と唸る水音と渦卷く波とに、七轉八倒するばかりです。敵が潛水艦の大禁物なる、水中で破裂する爆彈を投げ込み出したので

船は物に驚いた馬の樣に狂ひ出した。

七轉八倒する。

名人の手綱捌きもかくやと思はれるやうに。

す。其の時です、あなた方もその時はつく〴〵、勇敢な軍人の落付きと謂ふものに感心されるでせう。電燈が消えると共に、要所々々にパッと携帶電燈が灯されました。艦長の命令には少しも慌てた樣子がありません。名人の手綱捌きも斯くやと思はれる樣に、何處まで荒れ出すかと思つたこの船も、機敏な人々の働きで乘り鎭められて、一息に二百呎の深海に潛り込みました。その中に敵の矢種も盡きたらしく、もう爆彈の音も聞こえなくなりました。

水雷を發射してから早三十分、たしかに手答へはありましたが、その後の樣子が心懸かりです。新式の大軍艦は二三發の水雷で必ず沈むものとは限りません。やがて「靜か

艦長の口許には會心の微笑が浮かびました。

に浮き上がれ！」の命令が下りました。入學試驗の成績を見に行く樣に、希望と不安との境をたどりながら、船は一尺一尺と靜かに浮かび上がつて行くのです。そのペリスコープの先がヌッと海面に出た時に、艦長の口許には會心の微笑が浮かびました。そして艦は再び深く水中に潛つて、此の戰場を遠く離れましたが、やがて壓搾空氣でタンクの水を吹き拂つて、悠々と水面に浮かび出でました。

此の時です、押し立てられるマストの先のアンテナから、今日の手柄が放送されて國民の喜びに迎へられるのは。

佐佐木信綱
歌人
文學博士
竹柏園と號す
伊勢の人
明治五年生

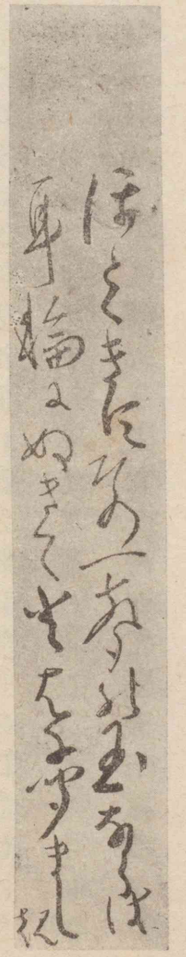
ほとゝぎすその一聲の玉ならば耳輪にぬきてとはに聞かまし　規

正岡子規
明治の俳人
名は常規
伊豫松山の人
明治三十五年歿
年三十六

九　旅

湯のやどりかどに吊せるから鮭の鱗に寒き山の冬の日　佐佐木信綱

鎌倉にわが來て見れば宮も寺も賤の藁やも梅咲きにけり　正岡子規



正岡子規筆蹟

若山牧水
歌人
名は繁
宮崎縣の人
昭和三年歿
年四十四

木々はみな殘えて空に芽をぞふくかなしみてをれば踏む草もなし　牧水

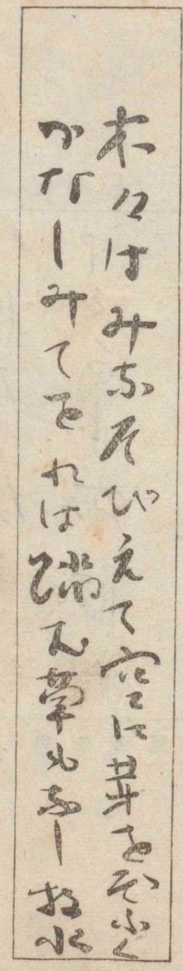
吉井勇
歌人
文學者
東京の人
明治十九年生

東雲どき
與謝野晶子
歌人
故寛氏夫人
泉州堺の人
明治十一年生

幾山河越えさりゆかばさびしさの終てなむ國ぞけふも旅ゆく　若山牧水

われは練る昨日は都大路また今日は柑子のかんばしき道　吉井勇

ほとゝぎす東雲どきの亂聲に湖水は白き波たつらしも　與謝野晶子



若山牧水筆蹟

窪田空穗
歌人
文學者
早稻田大學教授
名は通治
明治十一年生
長野縣の人

土岐哀果
歌人
東京朝日新聞記者
名は善麿
東京の人
明治十八年生

八月の廣葉を叩く白き雨深山と思ふ朝の軒かな　寛

與謝野寛筆讀

椰のかげつれぐげにも人を見て蹲りゐる
宮の鹿ども　窪田空穗

汽車おりて電話かくればこゝにしてむかし
の友の聲聞こえたり（奉天）　土岐哀果

與謝野寛
歌人
鐵幹と號す
京都の人
昭和十年歿
年六十三

金子薫園
歌人
名は雄太郎
東京の人
明治九年生

吉則
山口縣美禰郡

岩國
錦川の左岸
磐國山の下

わが船のけぶりの末に星見えて夕汐たかし
天草の灘　與謝野寛

かへり來て二日三日はまつはれる旅の心の
なつかしきかな　金子薫園

一〇　五虹の錦帶橋

七月二十七日の朝早く、吾等は吉則を發つて岩國に向つた。名高い十露盤橋の「錦帶橋」を見るためである。

岩國の停車場に下りてから電車に乘つて一里餘り行く

きれいな家並の揃つた本道。

こんもりとして風情のある山。

錦川　岩國川に同じ

横山村　岩國錦見町の西

弓形の橋が五つ相連つて一つの連合橋梁を成してゐる。

猿橋　甲府を去る十二里北都留郡大原

と、岩國の町につく。それから、きれいな家並の揃つた本道を十町ばかり西に行くと、道路をすぐに受けて一直線につづいた長い橋が見え、其の向うに高くはないがこんもりとして風情のある山が見え、やがて橋の兩側に美しい川、錦川の名に恥ぢない實に美しい川が、瀨をなし淵をなして流れて居るのが見えて來る。この橋が名高い錦帶橋で、岩國の市街と對岸の横山村とを繫ぐべく錦川の上に架けられたものである。弓形の橋が五つ相連つて一つの連合橋梁を成して居るのであるが、全體の長さは百二十五間、一番高い處は水面から六間餘りあるといふ事である。構造は甲州の猿橋と同じだといふ事であるが、同じく名橋とは云はれ

るものの、猿橋は小さい橋が唯だ一つあるだけであり、そして渡る所は平らな土橋になつてゐて、上から見ては何等の奇もなく、横からは汽車の鐵橋や水道の橋やが邪魔をして景觀を害ねて居り、唯だ一つ水面に近い上流の岩頭から仰ぐ眺めだけは、さすがに面白いが、それも岩や水や山が穢いので興がさめるといふ缺點がある。それに比

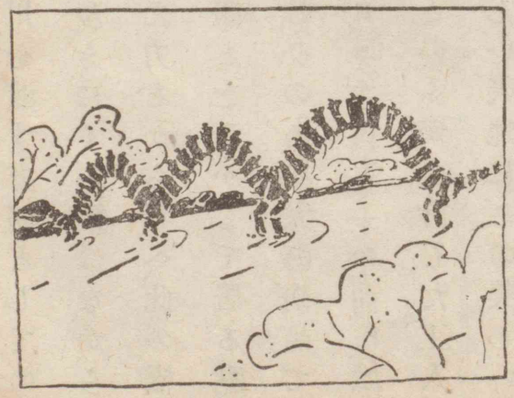
錦帶橋

錦帶橋は五箇連帶の規模が大きく美しい上に、山の美しさと川の綺麗さとが助け合つて、何とも云はれぬ美觀である。

關節の多い巨大な動物が、人里から山に移る爲めに蜿蜒とうねりうねつて、大川を越えて向うの山に登らうとするかのやうである。

べると、錦帶橋は五箇連帶の規模が大きく、美しい上に、山の美しさと川の綺麗さとが助け合つて、何とも云はれぬ美觀である。縱に一線に見ても面白く、上流や下流から橫さまに五つの虹の相連つた全面を見ても面白く、手近の大きい廣いのが段々狹く細く延長して行くのを斜めに見るのも面白く、橋の上で見るのも面白く、橋下の水面から仰ぐのも面白い。殊に山と川と町と橋と、全體を綜合して眺めると、關節の多い巨大な動物が、人里から山に移る爲めに蜿蜒とうねりうねつて、大川を越えて向うの山に登らうとするかのやうで、橋全體が活き〳〵して居る所に、何とも云はれぬ妙趣がある。私は橋畔にたゝずんで側面から見た時に、ふ

と、是れは前世界の巨大なる動物が大川を越す瞬間に、魔の電氣に打たれて其のまゝ動けなくなり、そして長い歲月の間に、皮や肉がすつかり腐り落ちて、弓なりの骨骼だけが殘つたのではないかと考へた。さう思ふと、向う岸に附いた西端の第一關節が、其の巨大な動物の頭のやうにも見え、市街に附いた東端の關節の水平に近い一つが、尾を平めたやうにも見える。私はまた山水配合の不思議な調子で、五帶の虹が同時に顯はれたので



幻の錦帶橋

世にこんな面白い橋はない、またこんな美しい橋はない。

美しい天地に美しい大存在を加へて、活きた土地を更に活かし、美しい國を更に美しくした。

はないかとも考へた。何にしても世にこんな面白い橋はない、又こんな美しい橋はない。川を渡す方便としての役目からいへば、こんな無駄の多い、歩きにくい橋はなからうが、美しさと、奇妙さと、活き〳〵した力とから考へ、此の橋一つが眼となつて、山と川と岩國全體とを活かして居る點から考へると、實に譬へ樣もない味はひのある大藝術品である。

この橋は延寶元年の今から凡そ二百五十年前に、城主吉川廣嘉の架設したものであるといふが、設計した工人は誰れであつたか。私は彼等が美しい天地にこの美しい大存在を加へて、活きた土地を更に活かし、美しい國を更に美しくした手柄に對して、限りなき感謝を捧げたいと思ふ。

岡本綺堂
小説、戯曲作家
名は敬二
昭和十四年歿
年六十八

私はこの錦帶橋、五虹橋、龍骨橋、今にも動き出しさうな巨獸渡川橋の美にすつかり打たれた。そしてそこ〳〵に川向ひの吉香公園を見、更にそこ〳〵に繪はがきや岩國縮などの記念品を買ひとゝのへ、目先にちらつく不思議な橋の幻を大切に護つて、車上の人となつた。

（「遠近」）

一一　夜叉王

岡本綺堂

登場人名

面作師　夜叉王　　源左金吾頼家
夜叉王の娘　桂　　下田五郎景安
同　楓　　修禪寺の僧

賴家　源頼朝の長子　元久元年歿　年二十三

修禪寺　一名桂谷山寺　眞言宗

元久元年七月十八日。

伊豆の國狩野の庄、修善寺村、桂川の畔、夜叉王の住家。

藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面などを懸け、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素燒の土瓶など掛けたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹、其のうしろは畠を隔てゝ、塔の峰つゞきの山又は丘など見ゆ。

二重の上手に續ける一間の家體は細工場にて、三方に古りたる蒲簾をおろせり。庭さきには秋の草花咲きたり。

娘楓、門に立ちて人を見送る體。そこに修禪寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、續いて源の頼家卿、廿三歳。後より下田五郎景安、十七八歳頼家の太刀を捧げて出づ。

僧　これ〳〵、將軍家の御微行ぢや。粗相があつてはなりませぬぞ。

楓　はは、ッと平伏す。頼家主從進み入る。夜叉王出で迎へて、

夜叉　思ひも寄らぬお成とて、何の設けもござりませぬが、先づあれへお通り下さりませ。

頼家は縁に腰打掛く。

夜叉　して、御用の趣は。

頼家　問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に殘さんと、曩に其の方を召出し、頼家に似せたる面を作れと、繪姿までも遣はして置いたるに、日を經れども出來せず。幾度か延引を申し立てゝ、今まで打ち過ぎしは何たる事ぢや。

五郎　多寡が面一箇の細工、如何に丹精を凝らすとも百日と

は費やすまい。お細工仰せ付けられしは當春の初め、其の後已に半年をも過ぎたるに、未だ獻上いたさぬとは餘りの懈怠。最早猶豫は相成らぬと、上樣の御機嫌散々ぢやぞ。

賴家　予は生れ付いての性急ぢや。何時までも待てど暮らせど埒明かず、餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、此の上は使など遣はすこと無用と、予が直々に催促に參つた。おのれ何故に細工を怠り居るか。仔細をいへ、仔細を申せ。

夜叉　御立腹恐れ入りましてござりまする。勿體なくも征夷大將軍、源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職の名譽、身の面目、いかで等閑に存じませうや。御用承りて已

に半年、未熟ながらも腕限り根かぎりに、夜晝となく打ちましても、意に適ふ程のもの一箇も無く、更に打ち替へ作り替へて、心ならずも延引に延引を重ねましたる次第、何とぞお察し下さりませ。

賴家　えゝ、催促の都度に同じ事を……。其の申譯は聞き飽いたぞ。

五郎　此の上は唯だ延引とのみでは相濟むまい。何時の頃

これは生無き粗木を削り、男女、天人、夜叉、羅刹、ありとあらゆる善惡邪正の魂魄を打ち込む面作師。

夜叉　までには必ず出來するか、豫め期日を定めてお詫びを申せ。

其の期日は申上げられませぬ。左に鑿を持ち、右に槌を持てば、面は容易く成るものと思召すか。家を作り塔を組む番匠なんどとは事變はりて、これは生無き粗木を削り、男女、天人、夜叉、羅刹、ありとあらゆる善惡邪正の魂魄を打ち込む面作師。五體に漲る精力が、兩の腕に自ら湊まる時、我が魂魄は流るゝ如く、彼れに通ひて、始めて面も作られまする。但し、其の時は半月の後か、一月の後か、或は一年二年の後か、我れながら確とはわかりません。

僧　これ〳〵、夜叉王殿。上樣は御自身も仰せらるゝ如く、至つて御性急でおはしますぞ。三島神社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取留の無い事ばかり申上げてゐたら、御癇癖が愈〻募らう程に、こなたも職人冥利、何日の頃までと日を限つて、確と御返事を申すがよからうぞ。

夜叉　ぢやというて、出來ぬものはなう。

僧　なんの、こなたの腕で出來ぬ事があらう。面作師も多くある中で、伊豆の夜叉王といへば、京鎌倉までも聞こえた者ぢやに……。

夜叉　さあ、それ故に出來ぬといふのぢや。わしも伊豆の夜

叉王といへば、人にも少しは知られたもの。たとひお咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を、世に殘すのは、如何にも無念ぢや。

賴家　何、無念ぢやと……。さらば如何なる祟りを受けうとも、早急には出來ぬといふか。

夜叉　恐れながら、早急には……。

賴家　むゝ、おのれ覺悟せい。

　癇癖募りし賴家は、五郎の捧げたる太刀を引つ取つて、あはや拔かんとす。奥より桂走り出で、

桂　まあ〳〵、お待ち下さりませ。

賴家　えゝ、退け、退け。

桂　先づお鎭まり下さりませ。面は唯今獻上いたします。なう父樣。

　と顧みれども、夜叉王は默して答へず。

五郎　何、面は既に出來して居るか。

賴家　えゝ、己れ、前後不揃の事を申立てゝ、予を欺かうでな。

桂　いえ〳〵、嘘僞りではござりませぬ。面は確に出來して居りまする。これ父樣。もう此の上は是非がござんすまい。

楓　ほんに然うぢや。昨夜漸く出來したといふ彼の面を、寧そ獻上なされては……。

僧　それが可い、それが可い。こなたも凡夫ぢや。名も惜

しからうが、命も惜しからう。出來した面があるならば、早う上樣に差上げて、お慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜叉　命が惜しいか、名が惜しいか、こなた衆の知つた事でない。默つておゐやれ。

僧　さりとて、これが見てゐられうか。さあ、娘御、其の面を持つて來て、ともかくも御覽に入れたが可いぞ。早う、早う。

楓　あい、あい。

楓細工場へ走りて、木彫の假面を入れたる箱を持ち出づ。桂受取りて賴家の前に捧ぐ。賴家無言に桂の顏をうちまもり、心少しく解けたる體なり。

桂　いつはりならぬ證據、これ御覽下さりませ。

賴家假面を取りて打眺め、思はず感歎の聲を擧げる。

賴家　おゝ、見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎　上樣御顏に生寫しぢや。

賴家　むゝ。（と飽かず打ちまもる。僧はしたり顏に、）

僧　さればこそいはぬ事か。それ程の物が出來してゐながら、とかう澁つて居られたは、夜叉王殿も氣の知れぬ男ぢや。はゝゝゝゝ。

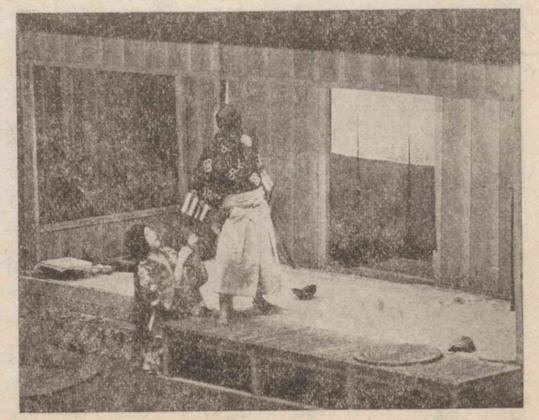
夜叉（形を改めて）何分にも我が心に適はぬ細工。人には見せじと存じましたが、斯う相成つては致方もござりませぬ。方々には其の面を何と御覽なされまする。

賴家　流石は夜叉王、天晴れのものぢや。賴家も滿足したぞ。

夜叉　天晴れとの御賞美は憚りながらおめがね違ひ。それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んで居りまする。

五郎　面が死んで居るとは……。

夜叉　年來數多打つたる面は、生けるが如しと人もいひ、我れも許して居りましたが、不思議や、此の度の面に限つて、幾度打ち直しても生きたる色無く、魂魄も無き死人の相



夜叉王（劇）

……。それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。

五郎　そちはさやうに申しても、我等の眼には矢張り生きたる人の面……。死人の相とは相見えぬがなう。

夜叉　いや〳〵、どう見直しても生ある人ではござりませぬ。しかも眼には恨みを宿し、何者をか呪ふが如き、怨靈怪異なんどの類……。

僧　あ、これ〳〵、其のやうな不吉な事は申さぬものぢや。御意に適へば、それで重疊。有難く御禮を申されい。

賴家　むゝ、とにもかくにも此の面は賴家の意に適うた。持ち歸るぞ。

夜叉　たつて御所望とござりますれば……。

賴家　おゝ所望ぢや。それ。

賴家顧にて示せば、桂心得て假面を箱に納め賴家にさゝぐ。やがて賴家立ち、五郎も立つ。

僧　やれ〳〵、これで愚僧も先づ安堵いたした。夜叉王殿、明日又逢ひませうぞ。

賴家行きかゝりて物に躓く。

賴家　おゝ、何時の間にか暗うなつた。

僧進み出でて桂に燈籠を渡す。桂假面の箱を僧に渡し、燈籠を持つて案内す。夜叉王はぢつと思案の體なり。

楓　父樣、お見送りを……。

夜叉王始めて心附きたる如く、楓と共に門口に送り出づ。

五郎　そちへの御褒美は、改めて沙汰するぞ。

賴家等相前後して出で行く。夜叉王起ち上つて、默然としてゐたりしが、やがてつか〳〵と緣に上り、細工場より槌を持ち來りて、壁に懸けたる種々の假面を取下し、あはや打碎かんとす。楓驚き取縋りて、

楓　あゝこれ、何となさる。お前は物に狂はれたか。

夜叉　切羽詰りて是非に及ばず、拙き細工を獻上したは、悔やんでも返らぬ我が不運。あのやうな面が將軍家の御手に渡りて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑ひを貽さば、一生の名折れ、末代の恥辱。所詮夜叉王の名は廢つた。職人も

今日限り、再び槌は持つまいぞ。

楓　さりとは短氣でござりませう。如何なる名人、上手でも、細工の出來不出來は時の運。一生の中に一度でも天晴れ名作が出來ようならば、それが名人ではござりませぬか。

夜叉　むゝ。

楓　拙い細工を世に出したを、さほどに無念と思召さば、これからいよ〳〵精出して、世をも人をも駭かす程の立派な面を作り出し、耻を雪いで下さりませ。

と縋りて泣く。夜叉王答へず、思案の眼を瞑ぢてゐる。日暮れて笛の聲遠くきこゆ。

（『修禪寺物語』）

千家元麿
詩人
東京の人
明治二十一年生

自分を空しくして。
天然の惠みに浴す。
私を有頂天の喜びに滿たしてくれる。

一二　天然の惠

千家元麿

私はたゞ眺めよう。
私はたゞ自分を空しくして
天然の與へる惠みに浴さう。
私は自然を讃へる事より出來ない。
私を貫く美は私を燃やし
私を讃歎の情に滿たしてくれる。
どこにこんなに私を有頂天の喜びに
滿たしてくれるものがあらう。

私はどこにも無い事を斷言する。
おゝ、この缺ける事のない歡喜よ、
いつも儼存する歡喜よ、
永遠に朽ちも荒みもしない歡喜よ。
私は本當に聖らかなこの空間を、
溢れる愛をもつて讃め歌ふのだ。
聖さよ、聖さよ。
この大いなる宇宙を飾る自然の一切が、
大いなるものも小さなるものも、何と云ふ聖らかな
神の面影を宿してゐるのだらう。
聖にして大なる田園よ。

百姓は百姓以上のものである。牛は牛以上のものである。

私を高めてくれ自然よ。私を鼓舞してくれ、自然よ。

百姓は百姓以上のものである。
木に繫がれて草を食んでる牛は牛以上のものである、
樹木も草も彼れ以上のものである。
そこで私は我々を生かし滿たす力に感謝する。
私達の周圍を取卷くこの儼存する神祕に向つて
私は歡喜に燃えて禮拜する。
私を高めてくれ、自然よ。
私を鼓舞してくれ、自然よ。
私を恍惚としてその靈感の中に抱きあげてくれ。
私はいつも樂しくこの靈感の中に、

高濱虛子
俳人、小說家
名は清
伊豫松山の人
明治七年生

左岸の方を見ても薄い靄がかゝつて、さなきだに廣い川幅は前にも倍して廣く、前途は茫邈として大海原のやうに見えた。

鼓舞されて生きてゐたく思ふ。

（「炎天」）

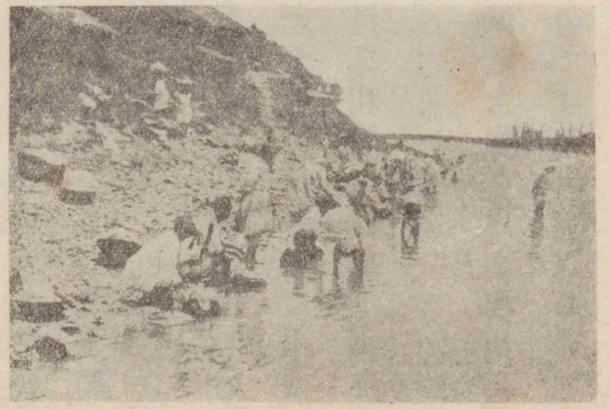
一三　大同江

高濱虛子

行手の白い靄は段々と濃くなる上に、右岸に近く下る我等の船からは、左岸の方を見ても薄い靄がかゝつて、さなきだに廣い川幅は前にも倍して廣く、前途は茫邈として大海原の樣に見えた。右岸の高い岸は、城壁と共に少しづつ低くなつて來て、其の上にポツ〳〵と朝鮮人の家屋があつた。さうして白衣の朝鮮婦人が崖の細道を下りて水際に蹲踞んで洗濯をして居た。衣を石の上に置いて棒を持つた右の手を振り上げて其れを打つ音が、手に取るやうに聞こえて來る。

だん〳〵人家が殖えるに從つて此の婦人の數も增し、或る場所には十四五人も列を作つて、一齊に衣を擣つて居た。「あの靄の中に見えて居る高い建物は何ですか。」と余は心を躍らせて聞いた。恰も蜃氣樓を見るやうな古びた丹碧の高樓が、靄の中から現はれ始めたのである。

赤青
丹碧の高樓が靄の中から現はれ始めた。



大同江畔洗濯の圖

「あの二つ見える、高い方が大同門、低い方が錬光亭です。昔小西行長が明の大將李如松と和を講じたのが、あの錬光亭であつたといふやうな傳説もあります。」と言つて、支局長はいつもの微笑を洩らした。

右岸の人家はだん〳〵殖えて行くばかりか、城壁もいつの間にか取拂はれて、川岸には廣い平地が帶の様に出來、其處に澤山の貨物が山の如く積まれて、和船や、韓船や、支那の戎克などがもやつて居た。

「これは日露戰爭當時でしたが、城壁を崩し岸を埋めて、貨物の陸揚げに便利なやうにしたのです。御覽なさい、此の邊の建物は皆立派なものでせう。こゝには朝鮮人で二三

大厦高樓が櫛比してゐる。

十萬の財産のある商賣人が澤山居ります。」と、支局長は説明した。成程見ると大厦高樓が櫛比して、岸を往來する人も活氣があり、船頭等の荷物の揚げ卸しの掛聲も勇ましい。今日車上から見た彼の「邯鄲の市」の事も思ひ出だされて、此の古都の富み榮えて居る樣が我が事のやうに賴もしく思はれた。

「平壤は景色のいゝ點が京都に似てゐるといふ事を聞いて居たが、此の大同江を有して商賣の盛んなところを見ると、寧ろ大阪といふ方が適當なやうですね。つまり京都と大阪とを併せて、而かも規模を擴大したといふやうなところですな。」と余は激賞した。

「さうです。」と支局長は賛成した。洪さんは口の端に大きな皺をよせて、冷やかな微笑を湛へて居た。

「どこに着けます。」と、興味が無ささうに、默つて我等の話を聞いてゐた船頭は、突然斯う言つて聞いた。

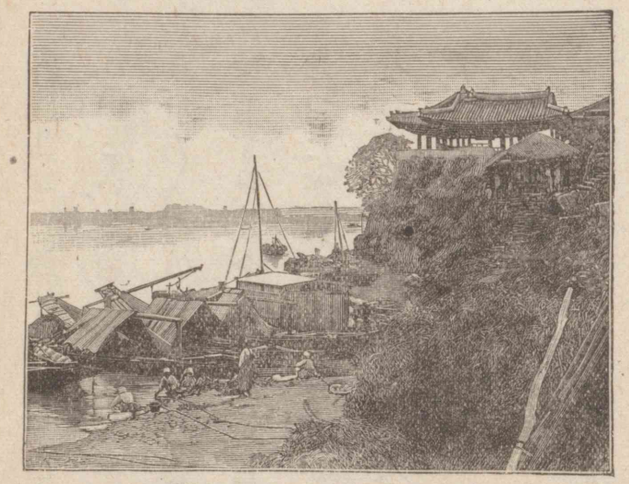
「稅關の横に。」と支局長は答へた。

「はい。よろしい。」と、船頭は又勇ましく漕ぎ出した。其の調子が、どうしても純粹の内地人としか思へなかつた。唯だ、内地の船頭ならば退屈の餘りに鼻唄でも謠ひさうな所を、此の船頭は默つて漕いだ。

「お前は内地に居た事があるのかい。」

「はい。福岡や、廣島や、高松に居た事があります。東京に

も一月ばかり居りました。」



大同江 錬光亭

「さうだらう。話が全く内地人と同じだ。」と、余は讃めて遣つた。

「若いものはすぐ覺えてしまひます。其れに小さい時分から覺えたのは、アクセントが正しうございます。」と、洪さんは傍らから口を出した。

靄の中に現はれた錬光亭は、いつの間にかもう右手に聳えてゐた。近よつて見ると、

遠望した時に想像した程の古色は認められないが、とにかく大同江畔に缺くことの出來ぬ趣味のある建物で、殊に「第一江山」といふ扁額の金文字があざやかに人の眼を射た。

「おや〳〵、あの古びた建物にガラス障子が嵌めてあるのは變ですね。」と、余は驚いて目を瞠つた。洪さんの目も怪しく光つたが、何とも云はなかつた。

「今は郵便局長の官舍になつて居るのです。」と、支局長は答へた。

「此の錬光亭がですか。」

「さうです。すぐ此の錬光亭に接して建てられたあの木造の粗末な洋館が郵便局ですからな。」と、支局長は笑つた。

余は其のガラス障子をはめて、白い窓掛を掛けて、此の錬光亭の中に住まつて居る郵便局長や、其の家族を考へずには居られなかつた。彼等は嗜き好んで此處に住まつて居るのであらうか。恐らくさういふ譯ではあるまい。軍隊が進んで或る城市を占領した時に、大きな公の建物は取敢へず其の舍營に當てられる。察するに、日清、日露兩戰時の慌たゞしい面影が、今猶ほ改變される機會を見出さずに今日に至つたものであらう。火事の立退人を收容した寺の本堂に、襁褓が下つて居るのと同格と考へれば、寧ろ其處に一種の哀れが見出だされないでもない。唯だ願はくは、一日も早く、郵便局長をして住宅らしき住宅に住まはしめ、同

時に錬光亭をして其の本來の面目を保たしめたいものである。こんな事を考へつゝある間に、船はやがて錬光亭の下を過ぎ去らうとした。其の時、

「ガラス障子の問題で、つい忘れてゐましたが……。」

と、支局長は突然、亭下の崖の中腹に在る祠を指して、思ひ出したやうに斯う云つた。「あれが大同江祠と言つて、一人の烈女を祭つた祠だといふことです。尤も同じやうな傳說が晉州にもあつて、何方が本家だか判りませんが、兎に角其の物語といふのは斯うです。やはり文祿の役の時、小西行長の部將の某といふが、桂月香といふ女と、此の錬光亭に登つて江水を眺めてゐると、其の女は此の武將を殺すことが、

邦家の讎を報ずる所以だと信じ、隙を窺つて、其の武將を崖下に突き落し、自分も亦身を投じて死んだ、其の氣節を尊んで、祠として祭つたと、斯ういふのであつたね、洪さん。」

「さういふ傳說もあるが、其れに似た事は文祿の役當時に、澤山あつた。此の大同江祠といふのは、何か他のものを祭つてあつたのに、後人がさういふ口碑を附會したものだらう。」と、洪さんは重きを置かぬやうな口吻であつた。余は事實と否とを問はず、彼の「第一江山」の欄下にかやうな物語をもつ小祠のあることを、寧ろ滿足に思つた。

大同門は錬光亭よりも一層高く峙つて堂々たる雄姿を見せてゐた。其の下を過ぎると右岸の人家は次第に其の

數條の楊柳が烟るが如く暮靄の中に隱見する。

屋根の形を變へて、棟にカーヴを見ることが少なくなつて來た。これは朝鮮町が日本町に移り變はつたことを示すので、此の邊は、もう新市街の特色をあざやかに見せて居る。支局長は靄の中に遙かに水を隔てた左岸を指して、「あそこが船橋里で、大島旅團が牽制運動を試みる爲め、幾度も强襲を企てゝ多くの死傷者を出した所です。」と言つた。其處には數條の楊柳が烟るが如く暮靄の中に隱見して、平和な別天地を爲して居た。「あの楊柳の間に幽かに見えるのが記念碑です。お見えになりますか。」と、支局長は念を推した。成程さう言はれゝば、記念碑らしいものが見える。そして二三人を乘せた一隻の韓船が今其の岸を離れて、此方を指して漕ぎつゝある。これ亦平和な村落の一光景である。

「あそこは渡場になつてゐるのですか。」

「さうです。」

と支局長は答へた。我等の船も、其の渡場の片方の船着場となつて居る稅關官舍の横に着いた。船を捨てゝ江岸に立つた時、後ろなる朝鮮人の船頭は、

「私は九曜館にゐるものです。電話がありますから、何時でも御用の時は掛けて下さい。私の名ですか、岩吉といひます。」と言つた。

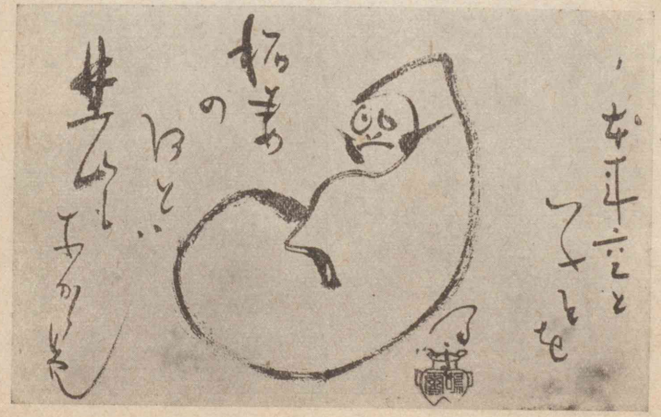
内藤鳴雪
俳人、漢學者
名は素行
愛媛縣松山の人
昭和元年（一九二六）
歿、年八十

（筆蹟）
本來空といふことを　鳴雪
稻妻のあとは野山もなかりけり

一四　元日や

内藤鳴雪

元日や一系の天子不二の山
流木のだぶり〳〵と春の川
菜の花の瞳一里や嵯峨の寺
大木の椿咲きけり山社
雀子や走りなれたる鬼瓦
古寺の廊下を通ふつばめ哉
若鮎の腹見せて行く淺瀨かな
二君には仕へ申さぬ紙子かな



内藤鳴雪筆蹟

詩仙堂
京都郊外一乘寺村にある、石川丈山の庵跡

二宮翁
經濟家
名は尊德
通稱金次郎
小田原の人
安政三年歿
年七十
櫻町
巖手縣紫波郡

疲れ鵜の羽たゝきもせで哀なり
夏山の城あり〳〵と夜明けたり
初冬の竹綠なり詩仙堂

一五　悔いて食はず

二宮翁が櫻町の陣屋にありし頃、出入の疊職人に源吉といふ者ありき。口を能く利き、才ありといへども、遊惰なれば常に貧乏せり。年末に及んで、翁の許に來り、餅米の借用を乞ふ。翁曰はく、「汝の如くいつも家業を怠る者が正月なればとて、年中勉强したる者と同樣に餅を食はんとするは

正月は不意に來るものにあらず、米も偶然に得らるゝ物にあらず。

心得違なり。正月は不意に來るものにあらず、米も偶然に得らるゝものにあらず。正月は三百六十日あけくれして來り、米は春耕し、夏耘り、秋刈りて、始めて得らる。汝は春耕さず、夏耘らず、秋刈らず、米なきは當前の事なり。されば正月なりとも餅を食ふ道理あるべからず。今貸すともいかにして返さんや。借りて返す道なき時は、罪人となるべし。正月に餅が食ひたくは、今日より遊惰の習ひを改め、山林に入

二宮尊德木像

一心爲往來是名謂思忘
一心爲清濁是名謂迷悟
一心爲輕重是名謂虛實

りて落葉を掻き、肥を拵へ、來年、田を作り、米を得て、來々年の正月、餅を食ふべきなり。まづ來年の正月は己が過を悔いて餅を食ふことを止めよ。」と懇ろに說諭せられたり。

源吉大きに先非を悔い、「遊惰にして家業を怠りながら、年中勉强する人と同樣に、餅を食ひて春を迎へんと思へるは、全く心得違なりき。この度は餅を食はず、過を悔いて年を取り、年明けなば、二日より家業を始め、刻苦して、來年の正月は、人並に餅を搗きて祝ひ申すべし。」といひ、厚くその教訓を謝して門を出づ。

一心爲件來是名謂思忘
一心爲清濁是名謂迷悟
一心爲輕重是名謂虛實

尊德筆蹟

しを〳〵として出で行く。

生れ替はりたるが如し。

翁は源吉がしを〳〵として出で行くを見て、俄に呼び戻して曰はく「余が教訓能く腹に入りたるか。」源吉曰はく「誠に恐れ入りたり。生涯忘れずして勉強すべし。」翁乃ち白米一俵、餅米一俵、金一両に大根、芋等を添へて與へらる。これより源吉は生れ替はりたるが如くなりて生涯を終へたりといふ。

（『二宮翁夜話』）

相馬御風
文學者
名は昌治
越後糸魚川の人
明治十六年生

モモンガア
鼯鼠（むささび）

一六　熊の話

相馬御風

面白い話もあればあるものである。

今年の二月上旬の事であつた。福島縣の山奥、海拔二千尺位の高地に五十戸程の村がある。昔から猿や熊が捕れるので名高いところであるが、或日、その村の一人の獵師が一疋の犬を連れて、夕方からモモンガア狩に出かけた。モモンガアといふ獸は、月夜に出たところをとるもので、何でも四肢に張つてゐる膜をはたらかして木から木へ、凧のやうにフワリ〳〵と飛び移つて行くのを、犬に追はせて、撃つ

犬がけたゝましく吠え出した。

高が兎か狸位。

のだといふことである。

さて其の獵師は、そのモモンガアをさがして、夕暮の薄暗がりの山中を段々に登つて行つたが、まださう高くも登らない中に、先に立つた犬が急にけたゝましく吠え出した。獵師は不審に思つた。「こんな淺い山にろくな獲物の居る筈がない。高が兎か狸位であらう。それにしても吠え方が變だ、一體何が居るのだらう。」と、彼れはあつさりとこんな事を考へながら、犬のゐる方へ近寄つた。

もう大分暗くなつてゐたので、よくはわからなかつたが、彼れはそこに穴があるやうな氣がした。そして犬がその穴の入口をのぞいて吠えてゐるらしく思はれた。「ははあ、

瀕死の重傷を負ふ。

全身血塗れになる。

獵師だけは辛うじて蘇生した。

こいつは狸だな。」彼れはこんな獨語をいひながら、犬を制しつゝその穴らしい所を覗いて見た。

その瞬間に、穴の中から大きな熊が飛び出して來て、いきなり獵師に抱きついた。此の餘りに思ひがけぬ突擊の爲めに、獵師はつひに鐵砲をも山刀をも使ふことが出來なかつた。又犬の奮鬪もその甲斐なくして、人も犬も瀕死の重傷を負はされた。そして重傷を負うた主人と犬とは、深い雪の中を辛うじて山を下りたが、我が家の戸口まで辿りついた時には、いづれも全身血塗れになつてゐて、やがて人事不省になつた。

やがて迎へ取つた家人達の介抱によつて、獵師だけは辛

が、犬はつひに再び起つことが出來なかつた。

おぼろけながら語られた一部始終。

見事に復讎をとげた。

思ひがけぬ景品。

うじて蘇生したが、犬はつひに再び起つ事が出來なかつた。しかし蘇生した獵師の口から、おぼろげながら語られた一部始終によつて、村人達は一齊に奮起した。

やがて翌朝未明に熊狩の團體が組織された。道しるべは人と犬との血潮の痕で、彼等はやがて熊の潜んでゐる穴の口を包圍することが出來た。そして難なく熊を討ち取つて、見事に復讎を遂げた。それから村人は萬歳を三唱して威勢よく引上げようとしたが、ふと熊の居た穴の入口に何か小さな生き物のピクピクと動いて居るのを見出だした。よく見ると、それは生れたばかりの小さな二匹の熊の子であつた。人々は思ひがけぬ景品を得て、再び勝鬨を上げた。

時ならぬお祭騒ぎにどよめいた。

死んだ親熊と生きてゐる子熊とは、やがて傷ついた獵師の家へと運ばれた。村は時ならぬお祭騒ぎにどよめいた。それから悲壯な復讎の歡びについて、熊を賣つた後の樂しみについて、村人達は威勢よく語り合ひながら、獲物の周圍に集つて痛飲し亂舞した。傷を負うた獵師は、此の時既に町の醫院に運ばれてゐたのである。

此の賑やかなお祭騒ぎの眞最中に、人々は思ひがけなく異樣の聲を聞いた。それは生捕にして來た子熊の啼き聲であつた。生れたばかりの、まだ目もあかず、毛もろくに生えてゐない二匹の子熊が、その時始めて啼き聲を立てたの

嘆聲も人々の口を洩れた。

である、しかも其の聲は何ともいひやうのない悲しい聲であつたのである。

勝ち誇つてゐた村人達は、その悲しい啼き聲によつて、始めて注意して子熊を見た。彼等は熊といふものが、非常の場合には、いつでも胎兒を生み落して身輕になり得る本能を持つてゐることを知つてゐた。

「こりやきつと月足らずの子だらうぜ。」

かういふ言葉が同時に人々の口から叫ばれた。

そしてすぐあとから、

「かあいさうに！」

といふ嘆聲も人々の口を洩れた。

今迄はしやいでゐた人々も、この光景を見ては、さすがに濕つた心地にならずに居られなかつた。

家の中の溫かさが加はるにつれて、熊の子はだん〳〵元氣を增して來た。そしてピク〳〵動いてはしきりに啼いてゐる、その傍らには、血まみれになつた親熊が死骸となつて横たはつてゐるのであつた。

今迄はしやいでゐた人々も、この光景を見ては、さすがに濕つた心地にならずに居られなかつた。

「かあいさうに！」

「ほんとに、かあいさうに！」

あちこちから同じ嘆息がつぎ〳〵に繰返された。しまひには、そのぶよ〳〵した熊の子を抱き上げて、懷に入れて、溫めてやらうとする者さへ出て來た。

赤子をかゝへた二三人の女が出て來て、其の中の一人が、我が兒を人に託して手早く熊の子を抱き上げた。

「おい、誰れか、乳の出る女子は居ないか。」

誰れかがこんなことを云ひ出すと、聲に應じて赤子をかかへた二三人の女が出て來て、其の中の一人が、わが兒を人に託けて、手早く熊の子を抱き上げた。そしてさらに氣味わるさうな樣子もなく、その熊の子に乳房をふくませた。しかし熊の子はまだ乳房をくはへることすら知らなかつた。女が變はり、乳房が變はつても、やはり駄目であつた。

人々は失望した。そしてせめて溫めてだけでもやらうといふので、圍爐裡の傍に、藁の寢床を作り、その中へ二匹の熊の子を入れて、代はる〴〵手を溫めては撫でてやつた。

かうして一旦復讎に勝ち誇つてゐた村人達が、いつしか

自分達の爲めに親無しとなつた二匹のあはれな子熊をいたはり育てる爲めに我を忘れて働く人々となつてゐた。

話の概略はこれで、東北の知人が手紙で知らせてくれたものであるが、何といふ美しい、原始的な、そして意味の深い話であらう。

面白い話もあればあるものである。

仙崖和尚
福岡縣博多の聖福寺の住僧
美濃（岐阜縣）の人
天保八年寂

綱綱

まづ畫が面白い。それから書が面白い、文句が面白い。畫と書と、文句三拍子調和して、この和尚の不思議な面目を現はして居る所が、殊に面白い。

一七　仙崖和尚

三月の十日である。上野の美術協會へ行つて仙崖和尚の遺墨展覽會を見た。數百點といふ夥しい出品があつて、和尚の作の殆んど全部を網羅して居るといふことであるが、その面白いことと云つたらない。まづ畫が面白い。それから書が面白い、文句が面白い。畫と書と文句と、三拍子調和して、この和尚の不思議な面目を現はして居る所が、殊に面白い。この和尚の閲歴や、禪僧としての境涯などは、私の殆んど知らぬ所であるが、書畫や文句に現はれた飄逸味、幽玄味、それから佛も惡魔も、珠も瓦も一しよくたにして居

る中に、溫かい諷刺教訓の面白くあらはれて居る工合は何とも云はれぬものであつた。

阿呆がポカンとして、月を眺めてゐる。
月のみか我が命もまた天にあり。

また同じやうな畫に、
あの月が落ちたらおれが拾ひましよ。

こんな風だ。繪と字と句との調和した間に現はれた微妙な味だから、何ともしやうがない。

大黑樣が俵の上に坐つて居る。上に句がある。
高うても賣つてはならぬ二俵切、

明治ッ兒、大正ッ兒のために書いたやうだ。

大きな一匹の鯛に於いて、一生の食物を釣つて居る心、天下を釣つて居る心が、其のにこ〳〵顔に溢れて居る。

惠比須様が鯛を釣つて居る。

足る事を知つたればこそ福の神

二匹鯛つるえびすなければ。

大きな一匹の鯛に於いて、一生の食物を釣つて居る心、天下を釣つて居る心が、其のにこ〳〵顔に溢れて居る。

目のわるい男が空を仰いで居る。空には月がある。一つの月である。

あの月の二つ見ゆるは月の病。

みんな月がわるいのだ。向うがわるいのだ。自分のわるいのではない。百年前の人の心はやはり百年後の人の心である。

利休の像がある。賛はたゞ六字。

吾茶天下人了。

虎の畫には

猫か虎か、あてゝ見ろ。

ろくでもない事を平氣で書いたのも大分ある。そしてそれを悉くろくにして居るから面白い。

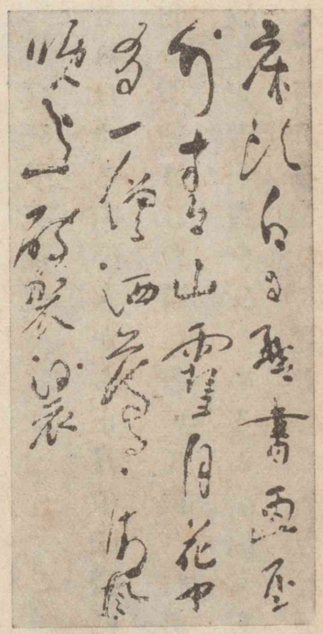
父死子死孫死。

これはさる有德人から、正月の床掛にと云つて、芽出度い文句を所望された時に、書いて與へたのだといふことである。

賴んだ者が眉をひそめると「何、いゝぢやないか、子が先に死んで親が殘るのは倒ま事で不吉だが、父が死んで、それから

床頭白日琴書畫。屋外青山雪月花。中有一僧酒落々。清風晩上破袈裟。

和尚の作は、字も、畫も、文句も、卑近である、簡單である、枯れ切つて居る。



仙崖和尚筆

子が死んで、それから孫が死ぬる、かう順當に行けば文句があるまい。」と和尚が云つたので、一倍悅ばれて、其の家の寶物になつたのだといふことである。

外にもこんなのが澤山ある。中には落ち切つた話に無上深奥の意義を寓したのも少なくない。

和尚の作は、字も、畫も、文句も、卑近である、簡單である、枯れ切つて居る。そしてその中に高遠の風致がある、複雜な味はひが籠つて居る、奥深い花やかさがある。至り高き人格

貝原益軒
江戸時代の學者名は篤信。別號は損軒
筑前の人
正德四年歿年八十五

我が身の足る事を知りて、分に安んずる人まれなり。是れ分外を願ふによりて樂しみを失へり。

の求めずして現はれた結果であらう。

（『雲來去』）

一八　清福

貝原益軒

我が身の足る事を知りて、分に安んずる人まれなり。多くは分外を願ふによりて樂しみを失へり。知足の理をよく思ひて、常に忘るべからず。足る事を知れば、貧賤にしても樂しむ。足る事を知らざれば、富貴を極むれども猶ほあきたらずして樂しまず。かくて富貴ならんは、貧賤なる人の足ることを知れるには遙かに劣れり。富貴貧賤は賢愚によらず、唯だ生れつきたる分あり。賢者も貧しく、不肖者

も富める人多し。是れ生れつきたる分なり。分に安んじて、分外を羨み願ふべからず。外を願ふ人は樂しみなくして憂へ多し。禍も亦これよりおこる。愚かなりと云ふべし。世には福われ程もなき人多し。我れよりも下なる人を見て、足る事を知り、分に安んじ、外を願はざれば、憂へなく、樂しみ多くして禍なし。又極めて貧しき人も、人各〻生れつきたる分ある事を知りて、分に安んじて、天をうらみ人をとがむべからず。

貝原益軒

富貴なればおごり易くして此の樂しみを得がたし。貧

富貴の人は世のはかなきわざ多きに迷ひて、書を讀んで道を樂しむことを知らず。

貧しきは富めるにまされり。讀書は貧者の樂しみ。

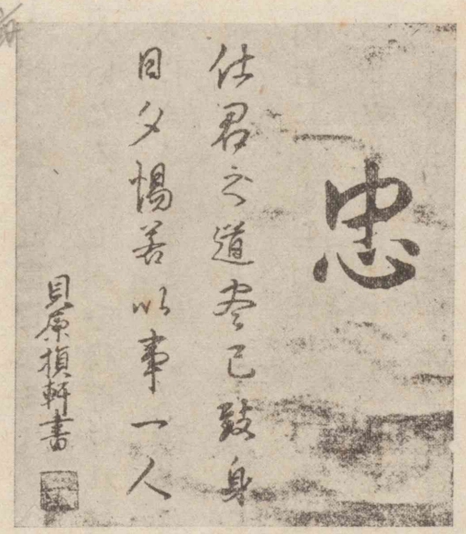
賤の人は怠り少なくしてさとし易し。富貴の人は世のはかなきわざ多きに迷ひて、書を讀んで道を樂しむことを知らず。然れば富貴なるはかへつて不幸といふべし。此の大いなる樂しみを得難ければなり。古語に貧しきは富めるにまされりといひ、又讀書は貧者の樂しみといへるもむべなり。我がともがら愚かにして又いやしければ、塵ひぢの數にもあらぬ身なれど、書を讀み道をたふとぶ樂しみは、いかなる富貴にもかへ難し。

清福といふ事あり。樂しみを好める人必ず之れを知るべし。是れ識者の樂しむ所にして、俗人は知らず。此の故に我が身に清福を得て大いなる幸あれども、これを知りて

其の身安く靜かにして、心に憂へなき、是れなん清福とぞいふめる。

忠
仕レ君之道盡レ己致レ身、日夕惕若以事二一人一
貝原損軒書

樂しめる人まれなり。たとへば寶の山に入りても、寶を知らざれば手を空しくして歸るが如し。清福は富貴の驕樂なる福にはあらず。貧賤にして時にあはずとも、其の身安く靜かにして心に憂へなき、是れなん清福とぞいふめる。いとまありて閑かに書を讀み古の道を樂しむは、是れ清福のいと大いなる樂しみなり。また其の心風雅にして、古書を讀み、詩歌を吟じ、月花をめで、山水を好み、四時のおしうつる折



貝原益軒筆蹟

良友ありて道を論じ、同じく月花を賞して樂しみ、名區佳境に遊びて、其の地の異なる形勝を弄ぶ。

折の美景と、草木のかはるぐ榮えうるはしきを見て樂しみ、貧しけれど飢寒の憂へなく、蔬食口に馴れぬれば味はひありて、肥濃なる美味を羨まず、淡薄なるはかへつて身を養ふに宜し。布の衣、紙の衾、いさゝか寒を防ぐに足れり。葎おひてあれたる宿に起き臥しても、風雨のうれへなかるべし。もし幸に書を多く貯へて架にさしばさまば、貧とすべからず。是れ眞の寶なれば滿籯の金にまされり。また良友ありて道を論じ、同じく月花を賞して樂しみ、名區佳境に遊びて、其の地の異なる形勝を弄ぶ。是れ皆清福を得たるなり。いかなる緣ありてか、かゝる福をうくるは、富貴の驕樂にまさりて幸甚だし。

（『樂訓』）

菊池寛
小説家
高松市の人
明治二十二年生
將軍家茂
安政五年將軍宣下
慶應二年歿
年二十一

雲と書き始めた文句が雨とならないうちに、筆がのたくつて、龍のやうな滅茶苦茶な曲線を幾つも書く。

一九　名君

菊池寛

十四代將軍家茂公は、先刻から惡戯ばかりして居る。戸川播磨守が懸命に書いた千字文の中の「雲騰致雨露結爲霜」といふ楷書の立派なお手本の方などは見向きもしないで、奉書のお草紙の上に、やたらに筆をのたくらせて居る。雲と書き始めた文句が雨とならないうちに筆がのたくつて、龍のやうな滅茶苦茶な曲線を幾つも書いて居る。一番最初の雲といふ字でさへまだはつきりとした形を成して居ない。まして騰ると云つたやうな難しい字は、まるで書く

目顔で笑ひかける。

眞面目くさつて居る。

志がないらしい。雲の形が中途から崩れ出して、雲中の龍のやうな出鱈目な曲線になつてしまふのである。そして時々眼がお草紙から離れて、傍の金蒔繪の火鉢の方に移つて行く。が、その火鉢の手觸りの柔かさうな灰に立てられて居る線香は、まだ半分もたつて居ない。それを見るといよ〳〵退屈し始めた十四代將軍は、二間ばかり下座に畏まつて居るお氣に入りの小姓の一人に、目顔で笑ひかけて見る。が、小姓が案外眞面目くさつて居るので、また仕方なしにお草紙に雲と書き始める。が、雲はいつまで經つても混沌としたまゝである。雲と書き始めた筆が自由に活潑に紙の上を無意味に一巡すると、家茂公は手荒く新しい紙を

めくる。先刻から何枚眞新しい御獻上物の奉書を無駄にしたか知れない。奉書のお草紙は十五枚綴ぢになつてゐる。線香の方は兎も角もお草紙の方さへ片が附けばその日のお稽古は終はつたことになるのだ。線香がなか〳〵たゝないと見て取つた家茂公は、今度は非常手段に出て、お草紙の方をなすり潰さうとして居るのである。

線香がなか〳〵たゝないと見てとつた家茂公は、今度は非常手段に出て、お草紙の方をなすり潰さうとして居る。

戸川安清　安政六年家茂の傅准小姓組番頭となる、時に年七十　慶應四年歿年八十二

戸川播磨守安清は默然として家茂公の亂行を見て居た。彼れが習字の御相手として召し出だされてから、まだ一月も經つて居ない。片假名やいろは假名のお稽古が濟んで、漢字のお習字に移ることになつて、彼れは御相手として特に召し出だされたのである。林家の人々などを差越えて

のかうした沙汰は、彼れとしては絶大な名譽であつた。彼れは老後の凡べてをお役目の爲めに盡くさうとして居る。そして將軍家の御手蹟を少しでもよくすれば此の上の御奉公はないと思つて居る。

處が、肝腎の家茂公は彼れが手を執つて教へ始めてから、一字一畫も眞面目に書いたことがない。いろは假名の稽古の御相手が、大奥の中藹であつた爲めだらう、習字と云へばたゞ惡戯をして時間を潰しさへすればいゝと思つて居るらしい。

幼少の折から嚴しい師に就いて一點一畫も忽せにしないやうにと教へられた播磨守は、書道に對して可なり敬虔

播磨守は書道に對して可なり敬

な心持を懷いて居る。彼れは口を漱いで、手を淨めた後でなければ筆を執つたことさへない。それだのに、家茂公は彼れの面前で惡戯ばかりしてゐる。書を書くことの尊さを少しも知つて居られない。慰み事か、弄び事か、何かのやうに書を瀆して居る。家茂公の爲すことがすべて播磨守の心を痛めた。七十を三つも越して居る一徹な播磨守の心を痛めた。彼れは、どうにかして主君のかうした心掛を矯さなければならないと思つた。その爲めには縱令御不興を蒙らうとも、お役御免にならうとも、厭ふところはないとまで思つて居た。お稽古の日が重なるに連れて彼れの決心は愈〻堅くなつて來た。ところが今日は家茂公の惡

慮な心持を懷いてゐる。

家茂公の爲すことがすべて播磨守の心を痛めた。七十を三つも越して居る一徹な播磨守の心を痛めた。

御不興を蒙る。

戯が何時もよりももつとひどい。一字だつて眞面目には書かれないのである。

白絹のやうにつや〳〵と光る奉書を、五六枚も無駄にして、更に幾枚目かの紙に出鱈目な曲線を書かれようとした時である。播磨守は無言のまゝ、家茂公の筆を持つた掌をキユッと握りしめた。家茂公ははッと本能的に駭かれたやうであるが、直ぐ子供ながらに自分の位置の優越を思ひ出されると、威壓的な烈しい目附で、播磨守の顏をぢッと見られた。が、播磨守はびくともしなかつた。彼れは柔かい小鳥のやうな生溫い掌を、意識して强く、少しは懲罰的に痛さを感ぜしめる位に强く握りしめながら、奉書の上に「雲騰

家茂公ははッと本能的に駭かれた。

播磨守はびくともしなかつた。

致雨露結爲霜」と書かせた。家茂公は筋ばつた掌で握りしめられる痛みに堪へかねて、中途で二三度振りほどかうとした。が、播磨守はいつかな放さなかつたが、その八字がすつかり書き了へられた時である、播磨守がその堅い把握の手を緩めて、ぢッと兩手を膝に置きながら、公が書いたと云ふよりも、自分の書いた八字に眺め入つた時だつた。赤くなつた右の掌をぢつと見て居た家茂公は、机の上にあつた青磁の水入れを持つて立ち上がると、いきなりたッぷりと堪へられて居た水を、播磨守の白髪の頭へざぶりとかけたまゝ、

播磨守はいつかな放さなかつた。

「わあッはゝゝ、わあッはゝゝ」と笑ひながら、大奥の方へ走り込まれたのである。

一徹な播磨守は主君から——幼少な年齢から來る惡戯であるとは云へ——烈しい侮辱を受けたので、頭から落ちる雫を拭ひもやらず、机に兩手をかけたまゝ、暫らくは身動きもしないで考へ込んだ。

駭いて馳け寄つたお側衆の小出勢州は、懷紙を出して、播磨守の額から顎にかけて拭き下しながら、

「餘りなお惡戯ぢや。御幼少であるとは云へ、餘りな御亂行ぢや。御主君とは云へ、心外で御座らう。拙者から御大老に申上げて、きつい御諫言を申上ぐることに致さう。御勘辨なされい。」と氣の毒さうに慰めた。

餘りなお惡戯ぢや。御幼少であると云へ、餘り御亂行ぢや。

井伊侯に申上ぐるなど輕はずみな事をして下さるな。今日といふ今日は、上樣の御仁慈のほどが骨身に徹へ申したわ。

播磨守は默然として勢州の拭くのに委せて居たが、濡れた上下の威儀を正すと、心持聲を落しながら、

「井伊侯に申上ぐるなど輕はずみな事をして下さるな。今日と云ふ今日は、上樣の御仁慈のほどが骨身に徹へ申したわ。勢州殿、有樣は斯樣で御座る。拙者今日はお机の前に坐つて以來頻りに小用を催したのを、ぢッと辛抱致し居つたところ、老年の悲しさには、懸命にお手を執つた砌り、つい失念して尿を少々洩したので御座る。君前に於いてかかる大不敬を犯した事が、若し大目附の耳に入らうなら、謹慎閉門はおろか、切腹の御沙汰にも至らうかと、心も心ならず苦慮致し居つたのを、それとお察し遊ばした上樣は、拙者

あッとばかり膝を叩いて、家茂公の聰明な仁慈に感嘆の聲を上げたのである。

の失策を御自身の惡戯で掩ひかくして給はつたのぢや。御仁慈のほど骨身に徹し申したわ。」と播磨守は老いた兩眼に涙をひた〳〵と湛へて居たのである。

小出勢州を始め並居る近習達は、あッとばかり膝を叩いて、家茂公の聰明な仁慈に感嘆の聲を上げたのである。

その事があつてから、此の逸話は江戸城の隅から隅へと傳へられた。登城する大名の一人から一人へと傳へられた。皆が異口同音に名君家茂公の君德を讃へぬ者はなかつた。たゞ之れを聞いた大老井伊直弼だけは、話を半分ほど聞くと眉をひそめながら、

「お惡戯にも程のあつたものぢや。」と言つたまゝ、話手が家茂公を讃め上げるのを聞いても、にこりともしなかつた。

（菊池寛短篇小說集）

芥川龍之介
文學者
俳號を我鬼といふ
東京京橋に生る
昭和二年歿
年三十六

大川端
隅田河岸

二〇　大川の水

芥川龍之介

自分は、大川端に近い町に生れた。家を出て若葉に掩はれた、黑塀の多い横網の小路をぬけると、すぐあの幅の廣い川筋の見渡される、百本杭の河岸へ出るのである。幼い時から、中學を卒業するまで、自分は殆んど毎日のやうに、あの川を見た。水と、船と、橋と、砂洲と、水の上に生れて水の上に暮らしてゐる慌たゞしい人々の生活とを見た。眞夏の日

水を見る毎に、何となく、涙を落したいやうな云ひ難い慰安と寂寥とを感じた。

なつかしい思慕と追憶との國にはひるやうな心持がした。

の午すぎ、燬けた砂を踏みながら、水泳を習ひに行く通りすがりに、嗅ぐともなく嗅いだ河の水のにほひも、今では年と共に、親しく思ひ出されるやうな氣がする。

自分はどうして、かうもあの川を愛するのか、あのどちらかと言へば、泥濁りのした大川の生あたゝかい水に、限りない床しさを感じるのか。自分ながらも、少しく、其の說明に苦しまずにはゐられない。唯だ、自分は、むかしからあの水を見る毎に、何となく、涙を落したいやうな、云ひがたい慰安と寂寥とを感じた。全く、自分の住んでゐる世界から遠ざかつて、なつかしい思慕と追憶との國にはひるやうな心持がした。此の心もちの爲めに、此の慰安と寂寥とを味はひ

銀灰色の靄と、青い油のやうな川の水と、吐息のやうな覺束ない汽笛の音と、石炭船の鳶色の三角帆と――すべて止み難い哀愁をよび起こす是等の川の眺めは、如何に自分の幼い心を、其の岸に立つ楊柳の葉の如く、をのゝかせたことであらう。

讀書三昧に耽る。

得る爲めに、自分は何よりも大川の水を愛するのである。

銀灰色の靄と、青い油のやうな川の水と、吐息のやうな覺束ない汽笛の音と、石炭船の鳶色の三角帆と、――すべて止み難い哀愁を喚び起こす是等の川の眺めは、如何に自分の幼い心を、其の岸に立つ楊柳の葉の如く、をのゝかせたことであらう。

芥川龍之介

此の三年間、自分は山の手の郊外に、雜木林のかげになつてゐる書齋で、靜平な讀書三昧に耽つてゐたが、それでも猶

長旅に出た巡禮が、漸く又故郷の土を踏んだ時のやうな、さびしい、自由なつかしさに融かしてくれる。

純なる本來の感情に生きる。

ほ、月に二三度はあの大川の水を眺めにゆくことを忘れなかつた。動くともなく動き、流るゝともなく流れる大川の水の色は、靜寂な書齋の空氣が休みなく與へる刺戟と緊張とに、切ない程あわたゞしく動いてゐる自分の心をも、丁度長旅に出た巡禮が、漸く又故郷の土を踏んだ時のやうな、さびしい、自由な、なつかしさに、融かしてくれる。大川の水があつて、始めて自分は再び純なる本來の感情に生きることが出來るのである。

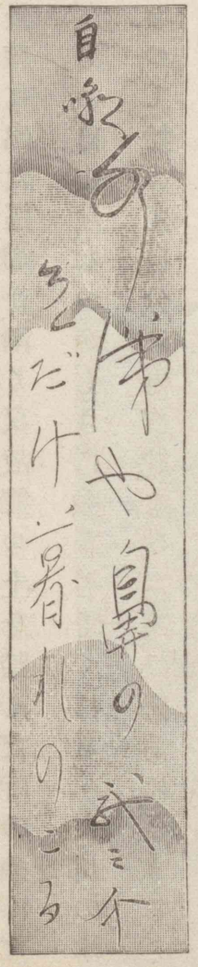
自分は幾度となく、青い水に臨んだアカシアが、初夏のやはらかな風に吹かれて、ほろ〳〵と白い花を落すのを見た。自分は幾度となく、霧の多い十一月の夜に、暗い水の空を寒

夏川の水から生まれる黒蜻蛉の羽のやうなをのをのき易い少年の心。

驚異の眸を見はる。

自嘲　水涕や鼻の先だけ暮れのこる　龍之介

さうに鳴く千鳥の聲を聞いた。自分の見、自分の聞くすべてのものは、悉く大川に對する自分の愛を新たにする。丁度、夏川の水から生れる黒蜻蛉の羽のやうな、をのゝき易い少年の心は、其の度ごとに新たな驚異の眸を見はらずには



芥川龍之介筆蹟

ゐられないのである。殊に夜網の船の舷に倚つて、音もなく流れる黒い川を凝視めながら、夜と水との中に漂ふ「死」の呼吸を感じた時、如何に自分は、たよりのない淋しさに迫られたことであらう。

硝子板のやうに青く光る大川の水。

あゝその水の聲のなつかしさ、つぶやくやうに、拗ねるやうに、舌うつやうに、草の汁をしぼつた青い水は、日

此の大川の水に撫愛される沿岸の町々は、皆自分に取つて、忘れ難いなつかしい町である。吾妻橋から川下ならば、駒形、並木、藏前、代地、柳橋、或は多田の藥師前、うめ堀、横網の川岸——何處でもよい。是等の町々を通る人の耳には、日を受けた土藏の白壁と白壁との間から、格子戸づくりの薄暗い家と家との間から、或は銀茶色の芽をふいた柳とアカシアとの並樹の間から、磨いた硝子板のやうに青く光る大川の水は、其の冷やかな潮の匂と共に、昔ながら南へ流れる懷かしい響きを傳へてくれるだらう。あゝ、其の水の聲のなつかしさ、つぶやくやうに、拗ねるやうに、舌うつやうに、草の汁をしぼつた青い水は、日も夜も同じやうに、兩岸の石崖を洗

も夜も同じやうに、兩岸の石崖を洗つてゆく。

河竹默阿彌　幕末明治の劇作家　本名吉村芳三郎　明治二十六年歿　年七十八

つてゆく。　班女と云ひ、業平と云ふ、武藏野の昔は知らず、遠くは多くの江戸淨瑠璃作者、近くは河竹默阿彌翁が、淺草寺の鐘の音と共に、其の殺し場の氣分を、最も力强く表はす爲めに、屢〻其の世話物の中に用ゐたものは、實に此の大川のさびしい水の響きであつた。

殊に此の水の音を懷かしく聞く事の出來るのは、渡し船の中であらう。　自分の記憶に誤りがないならば、吾妻橋から新大橋までの間に、元は五つの渡しがあつた。　その中で、駒形の渡し、富士見の渡し、安宅の渡しの三つは、次第に一つづゝ、何時となく廢れて、今ではただ一の橋から濱町へ渡る渡しと、御藏橋から須賀町へ渡る渡しとの二つが、昔のまゝに殘つてゐる。　自分が子供の時に比べれば、河の流れも變はり、蘆荻の茂つた所々の砂洲も跡方なく埋められてしまつたが、此の二つの渡しだけは、同じやうな底の淺い舟に、同じやうな老人の船頭をのせて、岸の柳の葉のやうに靑い河の水を、今も變はりなく日に幾度か橫ぎつてゐるのである。

水の動くのにつれて、搖籃のやうに輕く體をゆすられる心地よさ。

自分はよく、何の用もないのに、此の渡し船に乘つた。　水の動くのにつれて、搖籃のやうに輕く體をゆすられる心地よさ。　殊に時刻が遲ければ遲い程、渡し船のさびしさとうれしさとが、しみ〴〵と身にしみる。　低い舷の外は直に綠色の滑かな水で、靑銅のやうな鈍い光のある、幅の廣い川面は、遠い新大橋に遮られるまで、唯だ一目に見渡される。　兩岸

の家々は、もう黄昏の鼠色に統一されて、其の所々には障子にうつる灯の光さへ黄色く靄の中に浮かんでゐる。上げ潮につれて灰色の帆を半ば張つた傳馬船が、一艘、二艘と稀れに川を上つて來るが、何の船もひつそりと靜まつて、舵を執る人の有無さへもわからない。自分は何時も此の靜かな船の帆と、靑く平に流れる潮のにほひとに對して、云ひやうのないさびしさを感ぜずにはゐられないのである。

けれども、自分を魅するものは獨り大川の水の響きばかりではない。自分に取つては、此の川の水の光が殆んど何處にも見出だし難い、滑かさと暖かさとを持つてゐるやうに思はれるのである。

船宿の白い行燈をうつし、銀の葉裏を翻す柳をうつして、靜かに光りながら流れる水の色。

殆んど比喩を絶した、微妙な色調。

吾妻橋、厩橋、兩國橋の間、香油のやうな靑い水が、大きな橋臺の花崗石と煉瓦とをひたしてゆくうれしさは云ふ迄もない。岸に近く、船宿の白い行燈をうつし、銀の葉裏を翻す柳をうつして、靜かに光りながら流れるのも、其の重々しい水の色に云ふ可からざる溫情を藏してゐる。

殊に日暮に、川の上に立ちこめる水蒸氣と、次第に暗くなる夕空の薄明りとは、この大川の水をして、殆んど比喩を絶した、微妙な色調を帶ばしめる。自分はひとり、渡し船の舷に肘をついて、もう靄の下りかけた薄暮の川の水面を、何と云ふこともなく見渡しながら、其の暗綠色の水のあなた、暗い家々の立ち並んだ空に、大きな赤い月の出るのを見て、思

はず涙を流したのを、恐らく終世忘れることが出來ないであらう。

（『大川の水』抄）

二一　歸朝

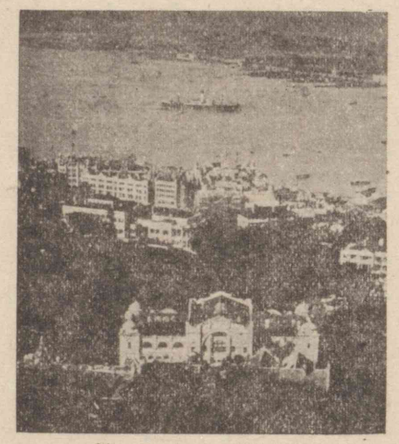
島崎藤村
詩人、小説家
名は春樹
信州の人
明治五年生

島崎藤村

新嘉坡まで歸れば、もう日本に歸つたも同じやうなものだとは、熱田丸の船員からよく聞かされたことだ。私はあの新嘉坡の港で、既に日本の下駄の音を聞いて來たし、あれからの船の中で、日本の子供の泣聲も聞いて來た。それにあの港からは護謨園に從事する同胞の乘客とも一緒になつたから、暑い時の男や女の素足の風俗をも久し振で見て

見ず知らずの人にさへ御辭儀の一つもして見たいと思ふほどの

來た。新嘉坡から香港、香港から上海と、國の方へ近づくにつれて、日本的な色彩を見つけることが多くなつて來た。



香港の一部

しかしそれは斷片的にである。神戸に着いた時は、實にすべてが日本でないものはなかつた。熱田丸の入港を知つて、上陸者を迎へようとする人達が、吾儕の周圍に集まつて來た。私はそれらの同胞に眼をそゝぎ、それらの人達の間を歩いて見た。遠く旅して歸つて來た私が、どうかすると、見ず知らずの人にさへ御辭儀の一つもして見たいと思ふほどの

心地になつた。

心地になつたが、無理だらうか。七月初旬の日の光は私の行く先にあつた。其の日本らしい日あたりを眺めるにつけても、言ひあらはし難い強い歡喜が私の小さな胸に滿ち來るのを覺えた。神戸の稅關には、私は午前十一時頃迄居た。灰色なペンキ塗の木造の建築物がそれだ。夏の制服を着けた稅關吏が、べた〳〵と澤山貼紙のしてある旅の鞄の上に、例の白墨で檢査濟の印を書いてくれた。さしあたり吾儕のやうな上陸者に取つては、兩替店を探す必要があつた。英貨で持つて來た旅費の殘りを日本の金に取替へる爲めに。ポンドやシリングを圓や錢にする爲めに。吾儕の宿屋もさう遠くはなかつたし、町も見たかつたし、私は

旅は私に巡禮者のやうな心持を與へた。

一種異樣な感覺が私の上に働き始めた。

三人連で兩替かた〳〵清潔な街路の土を踏んで行つた。

旅は私に巡禮者のやうな心持を與へた。疑ひもなく、これは廣い世界を遍歷して來た旅行者の誰れしもが經驗するものに相違ない。その心は、自分の國の町を見るにも、恰も外國の町を見るやうな感じを抱かせるのである。私は斯樣な心持がいつまで自分に續くかを知らない。恐らく、五十五日間の海上で、眞黑に日に燒け、汐風に吹かれて來た私の皮膚も、色の褪める時があらうやうに、斯樣な心持も次第に私から薄らいで行くのであらう。

とにかく一種異樣な感覺が、神戸に上陸したその日から私の上に働き始めた。私は今が今この世に生れて來たか

のやうな新しさと鮮かさと初心らしさとを以て、半生の間見慣れた故國の事々物々に對ふやうになつた。街路の多くが土であるのもめづらしい。歩道と車道との差別の少ないのもめづらしい。あそこの店頭に掲げてある紅や紫の旗は、こゝに出してある關西風の大きな提灯はと、そんな風に眼をとめて不思議に思ふやうになつた。その心持から言へば、下駄穿いて通る人を見るさへ不思議に思はれた。男や女の素足の風俗は既に新嘉坡あたりから見て來たものだが、それでも珍しい。

どうかすると、私はまだ海に居るやうな氣がする。何處かの港へ上陸したに過ぎないやうな氣がする。自分の國ではないやうな氣がする。私の心は南亞弗利加のケープタウンへも行き、ダーバンへも行つた。あのマライ人や印度人や支那人などの歐洲人と群居する新嘉坡あたりの町へも行つた。時々私は自分の眼を疑つた。何故といふに、自分の前を歩いて居る女が、それが實際日本の女ではなくて、マライ半島あたりの土人の女ではないかといふやうな氣を起こさせるのだから。

（『海へ』）

二二　鬼作左の嬉し泣き

新井白石

去にし天正十三年三月に、德川殿御背中に疔（ちやう）といふもの

新井白石
江戸の學者
家宣將軍侍講
名は君美
享保十年歿
年六十九

唯だ弱りに弱る。

祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。

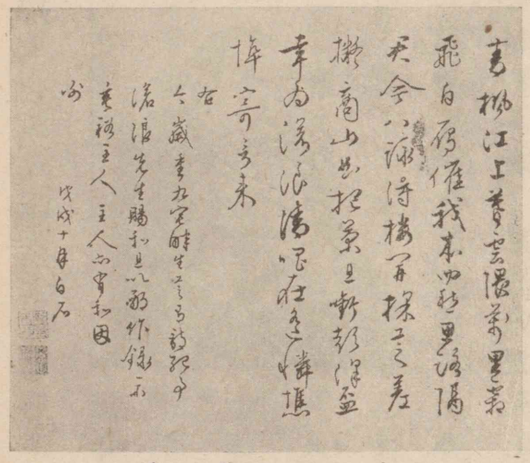
出來て、既に危く見えさせたまひしかば、内外の醫療、術を盡くしけれども、其の驗なく、唯だ弱りに弱らせたまひ、自らも是れまでと思召しけるにや、宗徒の御家人等召し集めて、御跡の事ども仰せおかる。人々の周章いふに及ばず、士民百姓等に至るまで、その程々に從ひて、祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。重次御枕に取りつきて泣く〳〵申しけるは、「殿も定めて覺えさせ給ひなん、重次が昔此の病を受けしに、立ちどころに驗得し良醫の候、彼れを召して見せ試み給ふべし。」と申す。「諸醫既に手を束ね、家康また死を決す、此の上醫療其の詮なし、且つは命惜しむに似たり。」とて、用ゐ給はず。重次大きに怒つて、「かほど大事の腫物、かろ〴〵しく思召し侮つて、事急なるに臨めばこそ、諸醫も術盡きぬれ。夫れにまた良醫して治しまゐらせんとするをも用ゐ給はず。失せ給はん事御心がらとはいひながら、あつたらしき命かな。諸醫術盡きぬと申す上は、彼等いかでか治しまゐらすべき。年老いたる重次が、御跡にさがつて、御供叶ふべからず。さらば御先へ參らん。」とて、御前を罷り立つ。徳川殿大きに驚かせたまひ、「あれ止めよ。」と仰せければ近く侍

御心がらとは云ひながら、あつたらしき命かな。

青楓江上暮雲、隈、萬里霜飛白鴈催、我本四愁思二路隔一、君今八詠得二樓開一、探レ芝差擬商山曲、把レ菊且卿彭澤盃、幸爲二滄浪清唱在一、遙憐二憔悴寄レ言來

右今歳重九宅畔生レ芝有レ詩紀レ事、滄浪先生賜レ和、且以二鄙作一錄示二垂裕主人一、主人亦有レ和因謝

戊戌十月　白石



白石筆蹟

らふ人々走り出で引きとゞめ、「仰せらるべき旨あらせられ候。」といふ。　重次大きに聲を怒らして、「最期の暇乞うて罷り申す者を、見苦しい殿原の止めやうや。」と罵つて出でんとす。「されば候、其の人を止めよとの御使が、えこそ止めぬ、と申せとは、おとなしくも候はぬ本多殿。」と云はれ、「げには、さも候。」とて、御前にまゐる。　徳川殿、「汝は物に狂ひてかくはいふか。　家康未だ死しはてぬに、たとひ家康が命終はるとも、汝等が世にあらんを頼みにこそ死すべけれ。　又汝等も如何にもして一日も世に殘りて、若き者ども捉して、我

本多重次

詮なき死の供せんとする事やある。

犬死せん人の御供其の詮なし。

負はぬ手も候はず。

が家の絶えざらん樣を計らんとは思はずして、詮なき死の供せんとする事やある。」と、仰せければ、「いやいや、それは人に依つての事に候。　重次も今少し年だに若く候はんには、仰せ迄も候はず、犬死せん人の御供其の詮なし。　重次若年の昔より、こゝかしこの軍に從つて、眼射られ、指落され、足切られて、負はぬ手も候はず。　人のかたはといふ程のかたは、重次が身一つに集まつて、世に交はらん事、叶ふべき身ならず。殿の御情深ければこそ、當家にては人に恐れも慕はれも仕りつれ、殿のなくならせ給ひなば、他人までも候ふまじ、先づ御聟の北條殿、我が國々を取らんとし給はんに、若き人々が、行末久しう仕へんと頼み切つたる主に忽ちに別かれて、氣

亡ぼされん事、踵をめぐらすべからず。

後指さゝる。

汝が云ふ所道理至極せり。

おくれし、はかゞしき矢の一筋をも射出だす事かなふべからず。當家亡ぼされん事また踵をめぐらすべからず。重次夫れ迄ながらへて、あの年寄つたるかたは者は、德川殿の譜代にて、某といはれし家人なるが、いかに惜しき命なれば、かく世には恥をさらすらんと、後指さゝれん事、老の恥何事か之れに過ぎ候べき。此の頃迄も、武田の家人等、御當家に召されて、さらぬ人にも手を束ね、膝を屈めしを、世にも哀れに思ひしが、今は此の老人めが身の上になつて候と存ずれば、殿に後れ參らせんが悲しきばかりにも候はず、我が身の果ても淺ましさに、先づ御先に死する事にて候。」と申す。

「汝が云ふ所道理至極せり。さらば醫療の事は汝が心に任すべし。天命既に至りて、家康空しくならんとも、汝もまた家康が心に任せ、如何なる恥を見つべくとも、一日も生き殘つて、後の事よきに計ふべしと存ずるや、いなや。」と仰せければ、重次が申す旨に任せられんには、重次いかで又仰せを背き參らすべきと申す。さらば醫師召させよとて召さる。醫師やがて參つて、御灸治よろしかるべしと申せば、重次艾とつて据うる。御灸の痛み覺えさせ給はねば、艾を增し加ふる事多くして、後いさゝか痛ませ給ふよし仰せければ、御藥をつけて參らせ、御藥湯をも進め奉りしに、其の夜の半ばに、御腫物潰れて、膿水血夥しう流れ出でて、御惱み立ちどころに輕ませ給へば、重次は嬉し泣きに聲を限りに泣く。御

前伺候の人々も、感涙を共に流しけり。

（『藩翰譜』）

二三　杉浦重剛翁　その一

小笠原長生

昭和三年十二月十一日は私に取つて何といふ感激の深い日であつたらう。それは外でもない、畏友杉浦重剛翁の墓に畏くも久邇宮邦彦王殿下並びに同妃殿下が、成らせられた御事である。翁としてこれ程の光榮がまたとあらうか。私も墓前に於て殿下を迎へ奉つた一人である。遺族の人々は申すに及ばず、故人の親友や門下生に至るまで、一人としてその面上に感涙の流れてゐない者はなかつた。

小笠原長生
海軍中將　宮中顧問官　子爵
慶應三年に生れた　家は舊肥前唐津藩主

杉浦重剛
教育家　滋賀縣の人　大正十三年歿、年七十

久邇宮邦彦王
元帥、陸軍大將
昭和四年薨、御年五十七

妃殿下
御名は倪子
公爵島津忠義の第七女　明治十二年御誕生。

誠に翁の樣に財もほしくない、生命もほしくない人は、普通人の二倍も三倍も感激性の深いものであるから、昨日兩殿下が墓前にお進みあそばされた時の英靈の感激は、果してどんなであつたらう。

杉浦重剛翁

翁が東宮御學問所御用掛を拜命して、始めて御學問所に伺候したのは、大正三年五月二十三日であつた。これより先四月一日、東宮御學問所職員職制御實施と共に、東郷總裁以下職員の主な者の任命はあつたが、翁の任命は五十餘日後れた。これは、倫理進講者の人選に就いて、東郷總裁以下銓衡委員、が愼重の上にも愼重に

銓（一詮）

考慮した爲であつた。

國士はある。精神家はある。皇漢學者もある。敬神家もある。が、そのすべてを備へて、同時に世界の大勢に通じ、時代の推移を看破する明を有し、科學的知識に富み、自由に外國語を解し、頑固ならず、また輕薄ならずと、かう數へ立てて、さて世間を見渡してみよ、果してこれだけの資格を完全に具備した人があるだらうか。先づないと言つてよい。しかし、ないでは濟まされない。是が非でも搜し出さねばならぬ。そこで總裁を始め一同額を鳩めて、熟議を凝した。その結果、唯一人立派な適任者を發見した。それが杉浦重剛翁である事は、事新しく言ふまでもない。

歿—沒

猪狩史山　教育家　日本中學校々長　名は又藏　福島縣の人　明治六年生

濱尾男　名は新　後、子爵に陞爵された　兵庫縣の人　大正十四年歿　年七十七

靖國神社　東京市麴町區九段坂上にある別格官幣社

松陰神社　東京市世田谷區世田谷にある吉田松陰を祀る

小村侯　外交官　名は壽太郎　宮崎縣の人　明治四十四年歿　年五十七

翁の歿後、私はその門弟で翁の進講に關して助手の役目を務めてゐた猪狩史山君から、御用係拜命當時の翁の行動に就いて種々の話を聽き、また日記の一部をも見せてもらつた。そして今更ながら、翁の誠忠に驚き、思はず泣かされた。翁は東宮大夫の濱尾男から、五月十一日に倫理進講の内談を受けると、暫時返答を猶豫せられん事を請うた。そして一方では、友人や門下生などの主な人々に一々意見を尋ね、一方では、靖國神社や松陰神社などに詣で、また乃木將軍、小村侯、佐々木侯などの墓を展するなど、人間の成し得る限りに於て、お受けすべきや否やの覺悟を練つた。やがて愈、それと決心した際、

佐々木侯　政治家　名は高行　高知縣の人　明治四十三年歿　年七十

蒲柳の質

數ならぬ身にしあれども今日よりは
わが身にあらぬわが身とぞ思ふ

といふ述懷の一首をものし、且家人に對してかう言つた、

「杉浦は御學問所の御用の完了するまでは決して死なぬぞ。」

何といふ立派な覺悟であらう。翁はあの樣な蒲柳の質でありながら、果して八年といふ長い年月の間殆ど病氣らしい病氣に罹られなかつた。實に人の一念程偉いものはない。さうして、どうだらう、翁は御學問所の御閉鎖後、幾ばくならずして病床に就き、大正十三年一月二十六日、東宮殿下御成婚の慶典を擧げさせられてから、僅かに十八日を隔てた二月十三日に永久の眠に就かれた。これ實に果すべきを果し、盡くすべきを盡くした理想的忠臣の終焉として、申分のないものではあるまいか。

翁が御學問所奉仕の際、東郷總裁は

「杉浦君は氣で生きてゐるのぢやから、氣に故障を起させない樣にすれば大丈夫ぢや。」

と言つて、翁の健康を保證された。私は總裁の活眼に敬服すると同時に、國士にして始めて國士を解するといふ事を、一層深く感じたのであつた。

その東郷總裁を、翁の方ではまた次の樣に讃歎してゐる。

「現下の日本に於て、東郷さん程な東宮御學問所總裁とし

鞠躬如たり。

ての適任者は他にあるまい。それは、英雄だとか、勇將だとかいふ點からではない。唯その終始一貫の誠實からだ。あの毎年の年末年始に行はせられる御終業式と御始業式との際、東郷總裁が御前に進んで、その學年の御成績や、將來に希望し奉る點を言上する時の樣子には、つくづく感心させられる。地位勳功共に高く、しかのみならず總裁の顯職にゐながら、鞠躬如たるあの態度の、何といふ奥ゆかしい事であらう。御學問所御開始の最初から八年後の閉鎖の時まで、いつとても東宮殿下に言上するその聲が、ふるへてゐない事はなかつた。一度あの樣子を見聞したら、その誠忠に打たれない者はないであらう。

狎…馴

榮達して愼み、近づいて狎れない、こんな事は君子でなければとても出來る事ではない。私は從來種々の場合に出會つてゐるが、これ程奥ゆかしい感じのした事はめつたにない。」

私は翁の東郷總裁に對するこの批評を移して、これを翁自身の覺悟としてもみたいと思ふのである。

二四　杉浦重剛翁　その二

翁の進講は、その範圍の廣かつた事驚くばかりで、皇道や國體などは申すに及ばず、世界の大勢、思想の潮流、軍器の發達、宗教の分布、科學の種類、自然界の現象などから、天文地理

相撲（角力）

徹—撤

山川男　名は健次郎　理學博士　男爵　福島縣の人　昭和六年歿　年七十八

口と共に心を以て進講した。心と共に身を以て進講した。

に及び、更に謠曲、相撲にまで及んでゐる。さうして結局は、それ等のすべてに對して、帝王の御覺悟はかくあらせられます樣にと結ぶのを常としてゐた。それも、進講する各種の事を、それ〴〵斯道の權威者に就いて徹底的に研究してから申し上げるのだから、なか〳〵容易な事ではない。東鄕總裁の兩翼となつて御學問所に奉仕した濱尾、山川の兩老も、翁の進講ぶりに滿足して、

「これでやつと安心した。」

と、覺えず笑みをもらした。要するに杉浦翁は、口と共に心を以て進講した。心と共に身を以て進講した。翁はこれが爲に、いかに人間としての七情と苦鬪を續けられた事だ

をさ〳〵

其所には杉浦もない。肉身もない。唯純なる日本臣道が、人間の姿を借りて現れてゐるのみである。

たゞに（啻）……のみならず

欽—欣

らう。これは、菩提樹下に於て煩惱の惡魔を降伏せしめた佛陀の修行にも、をさ〳〵劣りはせぬ。隨つて、其所には杉浦もない。肉身もない。唯純なる日本臣道が、人間の姿を借りて現れてゐるのみである。かくして東宮殿下の御德は、翁の啓沃によつて、日に月にその御光を添へさせられたのであつた。

「莊嚴にして雄大なる君德をば、御參考となるべき古今東西の格言及び實例に就きて御進講申し上ぐるに、たゞに善くその要領を御會得あそばさるゝのみならず、御自發の御見識の高邁にわたらせらるゝ事、ひたすら欽仰するの外なし。身、常侍の職にあらざるを以て、御平素を詳知

萬＝万

言外に溢る狀（狀）

する能はずと雖も、觀察の及ぶ限りに於ては、一々御實行あそばさるゝを見るなり。不肖三十八年間高等普通教育に從事し、萬を以て數ふべき天下の英才に接觸したれども、未だ曾て見ざる所の御性格なり。」

これは、大正八年四月二十九日東宮殿下滿十八歳に達し給ひ、同年五月七日賢所大前に於て御成年式を執行はせられた當日、杉浦御用掛が公表した謹話で、その感激の狀が言外に溢れてゐる。

月日は流れて、御修學年限たる七年はいつしか經過し、殿下には大正十年二月十二日を以て、御豫定の全科を御修了

令旨

あらせられ、同十八日いとも嚴肅に御修了式を擧げさせられた。その御式場に於ける東郷總裁の言上は、言々句々莊重を極めたが、肅然として御傾聽遊ばす殿下の御態度を拜して、參列諸員は何れも無限の感に打たれた。別けても杉浦御用掛は兩眼に涙をたゝへて、頭を垂れてしまつた。

同御用掛の倫理進講度數は前後合して實に二百八十一回に及び、これに關して手記した材料の稿本は、積めば鴨居に達するであらう。

御修了式後四日を經た二月二十一日午前十一時四十分、東宮殿下には東郷總裁以下御學問所職員一同に拜謁仰せ付けられ、左の令旨を賜つた。

今回御學問所の學業滯なく修了し、誠に喜ぶ。數年間、總裁以下職員一同の懇篤なる勤勞を深く謝す。

洵に恐れ多き極みで、一同感激に堪へなかつた。

それから數日の後であつた。私は御學問所に於て色々と翁の指導をうけ、殆ど先生として仰いでゐたので、その謝意を表し、旁〻記念の字でも書いてもらはうと思つて、例の如く淀橋なる日本中學校の校長室を訪問した。すると、事務員が私を迎へて。

「先生は少々風邪の氣味で、今日は出勤されません。」

といふ事であつたから、それでは、どんな樣子か、私邸に往つて見ようと、すぐ側のお宅を尋ねた。すると、顏馴染の書生さんが出て來て來意を聽き、奥にはいつたがやがて再び現れて、

「失禮ながら病室でお目にかゝるさうですから、お通り下さい。」

と告げた。よつて、書生さんの後に續いて病室に入つて見ると、翁は床の上に起直つてゐて、「やあ。」と平素の如く元氣な聲で呼びかけられた。が、どうも顏色が良くない、そこで一應の挨拶が濟んでから、

「もう病つたんですか、あまり現金ですね。」

と冗談半分に言ふと、翁は强ひて笑顏を作つて、

「なに大した事はありません。ほんの鼻風邪です。然し

あぶいで

日本中學校
東京市世田谷區松原町に移轉す。

小笠原さん、色々お世話になつたが、重大な御奉公が濟んで、御同樣こんな有難い事はないですな。杉浦など、御指導申上げたなどとは以ての外で、始終御指導を仰いでゐる樣な氣がしてね。唯もう戰々兢々と、寢ても覺めても……だが、恐れながら滿點以上であらせられるので、杉浦も始めてどうやら及第した樣な安心を感じましたよ。」

と言つて、遙かに高輪の方に向ひ拜伏された。稍あつて翁は腕をまくつて私の前に出し、

「これを見て下さい。」

と言はれた。あゝ、その腕は本當に骨と皮ばかりで、握つてみると、肱の邊でも私の指で樂に廻り、しかも氷の樣に冷た

兢—競

高輪　東京市芝區　當時、高輪御殿が東宮御所となつてゐた。

かつた。私はこれを離すに忍びず、握つたまゝじつと翁を見詰めた。翁は眼を塞いだ。

（「思ひ出を語る」）

二五　五箇條の御誓文

徳富蘇峰

五箇條の御誓文は、實にこれ維新大改革の宣言書である。日本帝國の新時代に於ける第一聲である。過去に於ける三千年の歷史を一括し、將來に於ける幾千載の國是を指定したる帝國不磨の寶典である。其の起草者の何人であるかを吟味する必要は毫もない。何となれば、これは一人一箇の意見に成つたものではなく、實に時代の一大志望、擧國

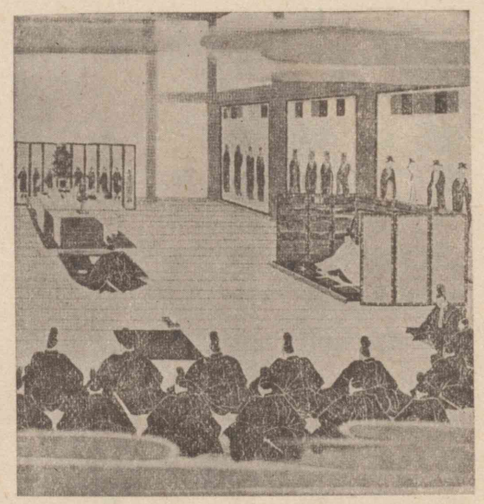
徳富蘇峰　文學者、評論家　歷史家　貴族院議員　帝國藝術院會員　名は猪一郎　熊本の人　文久三年生

括—活、恬

誓―哲、晢
給うた。

紫宸殿
京都御所の正殿
率ゐ。

の一大渇仰を、明治天皇の御名もて神明に誓はせ給ひ、天下に示し給うたものであるからだ。



御誓文の圖（乾南陽筆）

抑、五箇條の御誓文は、維新の詔書と同時に成つたもので、實に明治元年三月十四日、天皇紫宸殿に御し、群臣を率ゐて祖宗の神靈に誓ひ、之を中外に宣し給うたものである。

一、廣く會議を興し、萬機公論に決すべし。

これが明治二十二年、帝國憲法によつて、帝國議會を開設

綸―論、淪、倫

し給うた根元である。而して此の會議を起し、衆に諮るは、我が上代歴史に示す如く、祖宗以來の慣行である。

一、上下心を一にして、盛に經綸を行ふべし。

これは擧國一致、以て國運を進捗せしめ、帝國の世界に對する天職を遂行することを意味したもの。

一、官武一途、庶民に至る迄、各其志を遂げ、人心をして倦まざらしめんことを要す。

此の一條中の主眼は、「其志を遂げ」の點にある。其の志を遂ぐることは、國民の志望を遺憾なく發揮せしむることを意味する。それたゞ其の志望を發揮し、日に就り、月に將む。故に自ら倦むところを知らぬ。

一、舊來の陋習を破り、天地の公道に基くべし。

これが維新大改革の中樞點である。長き歷史ある國民は、動もすれば其の歷史に拘り囚はれて、其の歷史の最も不必要な部分、最も有害の部分、卽ち過去の糟粕とか、塵垢とか云ふ部分に執着するものである。故に建國の大精神に顧みて之を一洗する必要を生ずる。如何なる家に於ても、一年に一回乃至兩回の大掃除は必須である。況んや國に於てをや。復況んや其の國數百年鎖國の狀態に停滯したるに於てをや。

況(況)況んや……をや

茲に天地の公道と特書せられたるは、單に一國一州の舊例故慣を株守せず、進んで世界共通、人類總體の奉じて以て

總＝總

公道と爲す所を、正視濶步すべきを示し給うたもの。

一、智識を世界に求め、大に皇基を振起すべし。

讀んで字の如し。殊更吾人の說明を要しない。

我國未曾有の變革を爲んとし、朕躬を以て、衆に先んじ、天地神明に誓ひ、大に斯國是を定め、萬民保全の道を立んとす。衆亦此旨趣に基き、協心努力せよ。

如何にもあり難き思召である。此の五箇條の御誓文は、實に帝國の向ふ所、國民の趨く所を指點したる羅針盤であり、燈明臺であり、案內標である。吾人が維新の大精神に立返れと云ふのは、とりも直さず此の五箇條の御誓文に立返れと云ふのである。

（『國民小訓』）

讀ん(み)で

羅針盤であり、燈明臺であり、案內標である。

純正國語讀本　卷四終

昭和十二年七月廿五日印發
昭和十二年三月廿日訂正再版發行
昭和十一年二月廿五日訂正再版發行
昭和十一年八月廿五日訂正三版發行
昭和十六年八月廿五日訂正三版發行

純正國語讀本改訂版
各卷定價金六十錢

編纂者　五十嵐力
發行者　東京市牛込區原町二丁目四十六番地　山田謙吉
印刷者　東京市牛込區榎町七番地　五十嵐良晃

◆發行所　東京市牛込區原町二ノ四六　早稲田圖書出版社
振替東京一三六一五三番

◆配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

大日本印刷株式會社護町工場印刷

縣立世羅中學校

第二學年五學級

岡保憲

広島大学図書
2000301575